

# 紅 萌

京都大学広報誌 ● くれなゐもゆる



東アジア人文情報学研究中心  
北部構内の東、閑静な住宅街に  
あるこの白亜の建物は、京都大  
学の中国学研究のシンボリック  
的存在。書庫には30万冊を超える漢  
籍を収蔵。東方文化学院京都研  
究所（現在の東方学研究所の前  
身）の研究施設として1930年11月  
に竣工。スペイン僧院を模したロ  
マネスク風のデザインは、濱田  
耕作文学部教授（後の京大総  
長）の発案。設計者は武田五一と  
東畑謙三。2000年10月に文化庁  
「登録有形文化財」に指定

私を変えた、  
あの人、  
あの言葉

# 笑いながら死ねるのはどっち？

近藤等則

トランペット、プロフェッサー

中学校の修学旅行で行った京都の街に憧れた。

それで高校二年の秋、「京都の大学に行きたいんよ」とお袋に相談したら、「お金がないけん、国立しか無理よ」と言われた。京都で国立といえば京都大学しかない。大学案内で調べたら、「自由の学風」とあり、クラブ活動に軽音楽部もあった。中一から吹き始めたトランペットでジャズの真似事をしたかった。

「ヨシ、京大に行こう」と決め、「高三、一年間は受験勉強に集中するけん」と彼女に言ったら、ふられた。

一九六七年四月、工学部精密工学科に入学。鍛冶屋の息子だったから機械いじりが大好き。「世界一のエンジンを作ってやるぞ」と瀬戸内海性ノ一天気性丸出しで、京都生活が始まった。

「近藤さんはさすが四国の人だけおおいやして、坂本龍馬はんみたいだすえ」と下宿のおばさんに言われた。下宿他の学生は朝から大学に行くのに、一〇時頃起き出してくるからだだった。万事スートレートな田舎と違って、京都人の言い回しにはついて行けなかったが、鼻歌気分

だった。軽音楽部モダンジャズ科トランペット専攻も始まった。

一九六七年一〇月、京大生の山崎博昭が羽田空港で機動隊に殴り殺され、大学闘争に火がついた。山崎にはその一週間前にオルグされたので、シヨックだった。

「俺も命をかけて生きないと」と刷り込まれたのかもしれない。でも、集団の熱狂というのが苦手で、ジャズという表現の中のめり込んでいった。ジャズ喫茶でひたすらレコードを聴き、西部構内の部屋で深夜までラップを吹いた。

一九六九年の暮れ、付き合っていた女の子が一人の男を部屋に連れてきた。日本各地を放浪しているヒッピーだという。俺のラップを聴いて「演奏のテープをよこせ」と言った。数日後、「大阪のジャズ喫茶で演奏する話をつけてきた」と。それで、年明けから週六日、大阪のプロのミュージシャンと演奏する梅田通いが始まった。

エンジニアになるか、ジャズの道に進むか、悩んだ。ある日、解が浮かんだ。「笑いながら死ねるのはどっち？」



## ◎こんどう・としのり

1948年に愛媛県に生まれる。1972年の京大卒業と同時に上京し、フリージャズの道へ。1978年にはニューヨークに渡り、世界のミュージシャンたちとの演奏・ツアーで欧米を駆け巡る。1984年に東京を拠点に日本人バンドKONDO・IMAを結成し、東京発、世界に向けた音楽活動を展開。1993年には東京での活動をすべて打ち切り、一人、アムステルダムに拠点を移す。地球の大自然の中で、自然との共振・共鳴を求めてエレクトリックトランペットを即興演奏する「地球を吹く」を始める。2012年に日本に戻り、2013年には映画「地球を吹く in Japan」完成。現在、日本各地での上映会を回っている。

即、ミュージシャンだ、となった。まったく自信はなかったが、「卒業だけはして」とお袋に言われ、「授業に出なくて卒論だけ書いたら卒業させてくれる学部に変わらせて下さい」と、学生相談室に駆け込んだ。文学部英米文学科に転学部した。

あれから四十余年、二世紀の音楽を求めて、まだ一人格闘している自分がある。

# 紅 崩

くれなゐもゆる

京都大学広報誌

2014  
第25号

## ◎目次

- 2 巻頭エッセイ 私を変えた、あの人、あの言葉  
笑いながら死ねるのはどっち？ 近藤等則
- 3 巻頭座談会  
異文化のもとで学び、大きくて自由な世界を拓く  
ゲスト フォルカー・シュタンツェル  
ホスト 赤松明彦＋清水水展  
進行 内田由紀子
- 8 研究の最前線  
ミクロ経済学の理論で地球環境問題にせまる  
拡大するゲーム理論の応用分野 今井晴雄
- 12 邁進・京大スピリット——学生たちの活躍  
かるた会/グライダー部/2012年度京都大学総長賞  
東北復興支援学生ボランティア
- 14 授業に潜入！「おもしろ学問」講義録  
「個性重視」の社会的背景 小山静子
- 18 ふりかえれば未来——モノ語る京大の歴史  
熱意をたぎらせた寡黙な恩師  
福井謙一の遺したもの 田中一義
- 21 京都大学をささえる人びと  
学生とともに考える  
頼れるコーディネーター 村田淳
- 22 京都大学の動き  
追憶の京大追憶
- 24 遊んで・恋して・挫折して、楽しかった京大時代 松本修

# 異文化のもとで学び、大きくて自由な世界を拓く

三年間の京都大学留学を通じて

水戸学や合気道を学んだシュタンツェル氏は、

やがて駐日ドイツ大使となって日本に戻ってきた。

ドイツ語はもちろん、中国語、英語、フランス語を操り、

その国の文化にもつうじる大使は、

一筋縄ではゆかない国際政治の場で揺るぎない信念を發揮する。

その背景には、若き日に異国を旅して

多くの人と接してきた経験がある



〈上〉友人の父の着物を借りて、趣味の8mm映画の撮影のために大文字山にむかうシュタンツェル氏。仲間の学生に演技指導をして出演させていた(写真提供・吉嶋重巳氏/1975年3月11日撮影)

〈右〉卒業の春、京都国際ホテルでの送別会のあと、左京区浄土寺にあるシュタンツェル氏の下宿に仲間が集まった。アルコールがはいて上機嫌(写真提供・吉嶋重巳氏/1975年2月23日撮影)

シュタンツェル●異国の文化にふれると

き、二つの自然なアプローチがあると思います。一つは共通点を見つけるアプローチ。異なる民族の代表的な市民

と初めて知りあうと、「これはおなじ」、「これもおなじ」とまず共通点を考える人がいます。逆に、「これはちがう」、「こ

れもちがう」と考える人もいますね。

清水●大使は、どちらでしたか。

シュタンツェル●前者のグループの代表と  
言っただけかな。

清水●私の経験では、最初はちがいが目  
につきますけど、長く滞在すると共通

点を理解するようになりますね。

シュタンツェル●文化の理解にも二つの  
アプローチがあると思います。ことは

をとおして異文化を理解したいと思

う人がいます。でも、言語をマスター  
するには時間がかかる。だから、人の

行動を観察して理解しようとする人  
もいます。すると、日本にきたばかり

の人と長く滞在している人の判断と  
がずいぶん異なるときがあります。

ドイツの大使館にもこの問題はあ  
るのですが、ことをマスターした人

たちは日本文化の理解力があると思  
いがちですが、そうでもない。なんでも

知っている感じの人のほうがまちがい  
をおかしやすい。(笑)

清水●京都大学で勉強をはじめたころ

と、文化を深く理解しかけたところに感  
じた日本、そして大使の立場で見た日

本観はだいぶ変わりましたか。

シュタンツェル●そうですね。ただ、危  
ない点もあります。とくに大使になる

と、みんなから一目置かれて、なにか  
問題があると、「大使は日本のことを

よく知っているから、大使の説明を聞  
きなさい」と。そうになると、私の退屈

な説明でも聞くほかない。すると、「若  
い人の立場をぜんぜん認めしてくれない」

ということにもなりますね。(笑)

## 半年の旅の果てに日本に到達

シュタンツェル●日本に最初に到着した

のは鹿児島で、そこからヒッチハイク  
で京都にきました。最初はトラックの  
運転手が乗せてくれて、次が宮崎県の

ゲスト

● フォルカー・  
シュタンツェル

駐日ドイツ連邦共和国大使

ホスト

● 赤松明彦  
京都大学理事・学生図書館担当・副学長

● 清水展  
京都大学東南アジア研究所長

進行

● 内田由紀子  
京都大学こころの未来センター准教授

(「紅萌」編集専門部会)

合気道の先生でした。話はほとんど通じていないはずなのに、通じている気になっていました。

清水●大使は日本語ができたのですか。シュタンツェル●ドイツで二年間勉強したけれど、日本にくると——それも九州でしょう。

赤松●私は九州大学にいましたが、鹿児島は、ことがちよつと難しい。(笑)シュタンツェル●それでも合気道の先生のご自宅に泊めていただきました。奥さまとちよつちよつな子どもがいて、夕食がすむと「さあ、稽古に行きましょう」、「稽古つてなに?」、「合気道の稽古」、「合気道?」。夜の八時ですよ。でも、すばらしかった。見るだけで疲れたのに、「じゃあ、呑みに行こう」。

赤松●やはり九州の男だね。(笑)シュタンツェル●宮崎から大分、松山、高松、大阪、京都と移動してたくさんの人と会いましたが、人間的なつながりはすぐにできました。赤松●鹿児島に、カイバル峠を越えてアフガニスタン、インドと、ヨーロッパからずつと陸路をバスで旅されただけでしたね。

シュタンツェル●イラン、パキスタン、インド、タイ、カンボジア、香港、台湾、そして船で鹿児島。半年間の旅で、異文化の人間とつきあう練習をしました。どんな国の文化でも共通点を見つけていることができる自信もありました。でも、京都で勉強しているとだんだんと、「このときは誤解していた」、「あのときはほんとうの意味をわかってい

なかつたな」と、ちがいが目だつようになる。あまり知識がないときのほうが、自然な理解力で共通点は見つけやすい。ところが、あるていど深くはいると、ちがいが見えてくる。

### 男女関係というすばらしい架け橋

シュタンツェル●最初にそう考えたのは「ありがとう」ということばについてでした。ポルトガル語で「オブリガード」。そういう軽い気持ちでヨーロッパ人は、「ありがとう」と言います。でも、日本人に物をあげて何回も「ありがとう」と言われると、なにかお返しをしないとイケない気持ちにさせたのかと思うことがある。私の贈りものが迷惑なのではないかとも思ったりする。日本は私にとってはやはり「異文化」であり、考え方も人間関係のつくり方もちがう。

内田●よくわかります。私は心理学で比較文化を研究しています。いまは幸福感を研究しているのですが、「幸せ」と「ハッピー」とは似ているようでちがう。文化としての価値観や思考の型がちがいが関わっているように思います。とはいえ、異文化間でコミュニケーションするには、どこかでそのギャップをのりこえないといけない。大使はさきほど、「最初は共通点が見いだせました。でも、すこしずつちがいを意識しはじめた」とおっしゃいましたが、その次のフェーズはどのように迎えられるか。

シュタンツェル●男女関係をつうじて架け

橋ができるという感じだったかな。(笑)最初は、「みんな友だち」という感じで交流する。かんたんなコミュニケーションですからね。だけど、一か月、二か月、そして半年もいるとちがいが理解できる。そうして寂しくなる。だから、たいていの人は自分とおなじ文化の人を探す。たとえばドイツにいる中国人は、なかなかドイツの学生文化になじめない。ちがいを感じすぎるからです。だから中国人のグループをつくる。それは日本にいる西洋人もおなじです。この近くにあった留学生の寮、まだあるのでしょうか。

赤松●「京都国際学生の家」ですね。いまもありません。

シュタンツェル●あそこは外国人ばかりで、日本の文化を知らなくてすむ。でも、寮に住んでいない人は、かわりに日本人のガールフレンドかボーイフレンドができる。そういう関係をつうじて、異文化を理解するようになる。相手の家族ともつきあうと、もつと深くはいいこんでいく。それは世界中どこでもおなじ。それが第三のステップ。(笑)

### フィールドワークは京都学派の伝統

清水●大使の考え方の核には、若いころに世界を見てきた経験があるようですが、留学が決まったから世界を見ようとしたのですか。

シュタンツェル●そうです。ドイツ政府から奨学金と飛行機代をもらって、それが三〇〇〇マルク。このお金で半年



◎フォルカー・シュタンツェル Volker Stanzel  
1948年にドイツのフランクフルト近郊のクロンベルクに生まれる。フランクフルト大学で日本学、中国学、政治学を専攻。1972年から75年まで京都大学大学院文学研究科国語学国文学専攻に研究留学し、幕末期の思想(おもに水戸学)を研究する。留学中には、ドイツ語講座の講師を務めるなど文化交流に積極的に関わり、留学中にはじめた合気道は現在もつづけている。帰国後、ケルン大学にて哲学博士号取得。1979年にドイツ外務省に入省し、駐中国大使、政務総局長などをへて、2009年に駐日本大使に着任。在任中には、東日本大震災の被災地支援や「日独交流150周年」事業をはじめ、さまざまな交流事業に尽力。この対談から6日後の2013年10月31日に退任し、11月には母国に一時帰国。その後、アメリカに居を移し、講演活動などをとおして異文化交流に貢献。

赤松●そういう精神は、ドイツで育まれたのですか。それとも七十年代という時代の……。

シュタンツェル●六十年代の若者は、ヨーロッパを自由に旅行できた初めての世代だったと思います。ヨーロッパをヒッチハイクで旅行する人がたいへん多かった。アメリカ人もソ連の人も、みんなヨーロッパにきて旅をしていた。日本人はまだ少ないころだった。とにかく、われわれは両親の世代とちがって自由だという意識があって、国境を越えて旅行して、ヒッチハイクで帰ったりしていた。次はアフリカだ、中東地区だ。

だから、奨学金を得て日本に留学するというのは、すごく魅力だったし、飛行機はもつたない。そういう好奇心の強い時代だった。

清水 ● 京都大学の山岳部や探検部には海外遠征の伝統があって、若いころにそうした経験を積んだ人たちがやがて研究者になった。現地と現場でのフィールドワークが大切だと考え、つねにそこに戻って研究するのが京都大学の特徴になっている。その核に、やはり大使がおっしゃる好奇心があった。

自分を育てる、自分を鍛えることが重要だと思っていました。世界を経験することが重要だと。  
清水 ● 日本の諺に「百聞は一見にしかず」。現地に行つて、生身の人と話す。ことができずとも、面と向かつて目を見てコミュニケーションすれば、通じるものがある。

### 異文化接触は人間的な成長の早道

赤松 ● 『何でも見てやろう』（小田実の精神が日本の若者に広まったのも、六十年代。私は八一年にパリに留学しましたが、大使とおなじようなことを考えて、インドからアフガニスタンをへてフランスにと思ったのですが、七九年から八〇年に、ホメイニ革命、アフガン侵攻、そしてイラン・イラク戦争とあって、アジアからヨーロッパへの陸路をバスで行くのは困難になった。

清水 ● 私は現地の文化に関心があつて調査に行きましたが、彼らには日本人がめずらしい。私は調査するが、いっぽうで相手からこちらが調査されてもいる。水道がないから、毎日川で水浴びをすると、それをどこかで見ている。日本人の裸はこうだ、こんなものを食べていたと、こっそり見ている。私も好奇心をもつて見ている。(笑)

シユタンツェル ● いまは飛行機代が安くなって、すこしのお金で世界のどこにでも行ける。貧乏旅行が必要ないというか、パッケージ・ツアーに参加しない旅のほうがかえって高くつく。でも、重要なのは、異文化に対する好奇心。

清水 ● 私には彼らに強い影響を与えている。次に訪ねてくる日本人への態度は、先生の印象によつて変わる。われわれが異文化にふれると、その地の人

赤松 ● 私もヒッチハイクをしたかった。

清水 ● 私が人類学を学びはじめたころは、調査地に外部の影響をおよぼさないようにすべきだと教わりました。しかし、大使がそうだったように、私も異文化と接触することで人間的に成長したいと思つていた。そうするうちに、「少数民族や先住民たちも異文化、外部の世界と接触して変わるのはいのことだ」と思ふようになりましたね。

赤松 ● 私でも見てやろう』(小田実の精神が日本の若者に広まったのも、六十年代。私は八一年にパリに留学しましたが、大使とおなじようなことを考えて、インドからアフガニスタンをへてフランスにと思ったのですが、七九年から八〇年に、ホメイニ革命、アフガン侵攻、そしてイラン・イラク戦争とあって、アジアからヨーロッパへの陸路をバスで行くのは困難になった。

清水 ● 私も、いやだったら「家にきませんか」とは誘わない。シユタンツェル ● さきほどの「ありがとう」とおなじような問題です。たまたま車に乗せた外国人を自分の家に招待する意味と、私がドイツで日本人を招待するのはちがう。異文化との出会いは複雑です。相手の行為が理解できると思つても、相手の考えはちがうかもしれません。

赤松 ● 私でも見てやろう』(小田実の精神が日本の若者に広まったのも、六十年代。私は八一年にパリに留学しましたが、大使とおなじようなことを考えて、インドからアフガニスタンをへてフランスにと思ったのですが、七九年から八〇年に、ホメイニ革命、アフガン侵攻、そしてイラン・イラク戦争とあって、アジアからヨーロッパへの陸路をバスで行くのは困難になった。

清水 ● 私も、いやだったら「家にきませんか」とは誘わない。シユタンツェル ● さきほどの「ありがとう」とおなじような問題です。たまたま車に乗せた外国人を自分の家に招待する意味と、私がドイツで日本人を招待するのはちがう。異文化との出会いは複雑です。相手の行為が理解できると思つても、相手の考えはちがうかもしれません。



◎赤松明彦(あかまつ・あきひこ)  
京都大学理事(学生・図書館担当)・副学長。1953年に宇治市に生まれる。京都大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了。1983年パリ第三大学第三期博士課程修了(インド学博士)。九州大学文学部教授、京都大学大学院文学研究科教授、同研究科長・文学部長などをへて、2010年から現職。専門は、インド哲学、サンスクリット学、言語哲学。近著に『仏教とは何か——宗教哲学からの問いかけ』(共著、昭和堂)がある。



◎清水 展(しみず・ひろむ)  
京都大学東南アジア研究所所長。社会学博士(東京大学)。1951年に横須賀市に生まれる。東京大学大学院社会学研究科文化人類学専門課程修士課程修了。九州大学教養学部助教授、同大学大学院比較社会文化研究院教授、京都大学東南アジア研究所教授などをへて、2010年より現職。専攻は文化人類学。近著に、『草の根グローバルセッション——世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』(京都大学学術出版会)がある。所長を務める東南アジア研究所は2013年に50周年を迎えた。



◎内田由紀子(うちだ・ゆきこ)  
京都大学こころの未来研究センター准教授。京都大学博士(人間・環境学)。1975年宝塚市に生まれる。2003年京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。ミシガン大学客員研究員、スタンフォード大学客員研究員、甲子園大学文学部心理学専任講師などをへて、2011年から現職。ドイツ日本研究所の顧問も務める。専門は文化心理学・社会心理学。価値観や思考様式などの「文化」とこころの関係に関心をもち、幸福感・他者理解・対人関係についての文化心理学研究を進めている。共著に『ひきこもり』考(創元社)などがある。

赤松 ● それでも、大使は相手を信じて家に行つて、合気道の道場に行つて、お酒を呑んで……。

清水 ● 複雑ですね。酔つたら財布を盗られるかもしれない……。

赤松 ● そのあと、合気道の先生とおつきあいはなかったんですか。そうしてありますね。

シユタンツェル ● あとで考えると不思議。合気道の先生と会つたことがきっかけで、京都大学にきて合気道を習いたいと決めた。でも、「先生ありがとう。合気道の勉強のきっかけになつてよかった」と、手紙も出さなかった。

赤松 ● 外交官の仕事というのは、どういうものですか。

シユタンツェル ● 外交官は、ある目的のために異文化の人間と協力すること

ことを超えて議論できる能力を磨く

シユタンツェル ● さきほどの「ありがとう」とおなじような問題です。たまたま車に乗せた外国人を自分の家に招待する意味と、私がドイツで日本人を招待するのはちがう。異文化との出会いは複雑です。相手の行為が理解できると思つても、相手の考えはちがうかもしれません。

赤松 ● 私でも見てやろう』(小田実の精神が日本の若者に広まったのも、六十年代。私は八一年にパリに留学しましたが、大使とおなじようなことを考えて、インドからアフガニスタンをへてフランスにと思ったのですが、七九年から八〇年に、ホメイニ革命、アフガン侵攻、そしてイラン・イラク戦争とあって、アジアからヨーロッパへの陸路をバスで行くのは困難になった。

清水 ● 私も、いやだったら「家にきませんか」とは誘わない。シユタンツェル ● さきほどの「ありがとう」とおなじような問題です。たまたま車に乗せた外国人を自分の家に招待する意味と、私がドイツで日本人を招待するのはちがう。異文化との出会いは複雑です。相手の行為が理解できると思つても、相手の考えはちがうかもしれません。

が仕事です。とくに相手の国を代表する外交官や政治家、経済界の代表との協力ですね。

シリアの内戦はいま、世界の重要な問題ですね。内戦は終わってほしい。だけど、自国の意思だけで介入はできません。もつと大きな戦争になるかもしれないからです。これは典型的な外交の問題です。シリアを監視するほかの国の代表といっしょに解決策を考えるのが仕事です。イランは重要な相手ですが、彼らの立場はちがいます。アラブとペルシャは文化がちがいます。イスラームの宗派も、国の利益もちがいます。アメリカとフランスとロシアもちがう。ドイツもまた別。そういう文化的、経済的背景の異なる国が話しあう。そういうときに、相手国の言語のできる外交官が勝つでしょうか。

**赤松**●そういう問題ではないですね。**シュタンツェル**●そうですね。問題解決には、まず重要なポイントを見つけること。言語は、ある文化を理解するうえで不可欠です。しかし、外交官も、商売する人間もおなじだと思ふのですが、かざられた問題を解決するだけなら、相手のことばは話せないほうがよいかもしれません。英語やフランス語など共有できることばで問題を詰めて、互いに合意点を探すほうが効率的かもしれないのです。イランやロシアを文化的に理解しないと会議が進まないようでは困る。商売では契約を結ぶことが優先されます。それには共有できることばで話すほうが効率的ですね。

**赤松**●言語や文化を超えて共有できる価値もまたありますからね。

**シュタンツェル**●中国での商売の成功を望む人のために、中国で成功するための秘訣を指南するような本が出ていますね。相手の国を理解するために読みたい本。だけど、ことばができなくても中国で成功することは可能です。いつぼうで、私が初めて日本にきたときとおなじように、「みんな友だち」という感じもまた必要かもしれない。**清水**●馬があうとか。

**シュタンツェル**●そう、馬があう。これは異文化との一つのコミュニケーション。不思議なことに、知らない文化の国の人とでもそれがある。

私はサモアに三週間滞在して、ことばの通じない人たちの村に行きましたが、馬のあう感じのする人、つまらないと感じる人がいることがすぐわかる。でも、信頼できる人がどうかはわからない。馬があうと感じた人があとで財布を盗るかもしれない。(笑)でも、互いにおなじ感じだと、なんとなくわかるのです。

### ことばという仮面を超えて築く人間関係

**内田**●赤松先生は留学先のパリでもおなじようなご経験をされましたか。

**赤松**●私はインド哲学、サンスクリットが専門です。基本的にはことばによって世界を理解する、すなわちテキストを理解することで異文化を理解しようとしてきました。インド哲学が専門

だと言うと、「インドにはよく行きましか」と尋ねられます。でも、「インドに行けばインド哲学がわかるわけではない」と思いながら生きてきた。(笑)

**シュタンツェル**●インド哲学の当時の研究の中心がパリだったんですね。

**赤松**●サンスクリット研究やインド学は、学問としては、一八世紀末にヨーロッパで始まりました。パリはその中心の一つ。ドイツのベルリンやハンブルク、ボンなどの大学にも世界から学生が集まっています。

**シュタンツェル**●サンスクリットでコミュニケーションしていたフランス人の専門家はいましたか。

**赤松**●国際サンスクリット学会の使用言語は、英独仏とサンスクリットです。インド人の学者の中には、サンスクリットしか話さない人もいます。でも、私はフランス語のほうが楽です。(笑)

大使は、中国人とはすぐに友人になれるかもしれないとおっしゃったが、インド人もおなじですか。

**シュタンツェル**●外国人としてインドに旅行すると、知りあう人、顔をあわせる人、みんな英語ができる。だから、すごく親しい感じがする。でも、お寺に行くとか文学を読むとかすれば、異文化であることを意識します。それでも、日常生活はスムーズに進行する。だけど、それは誤解です。大きな誤解です。長くいると、「ああ、これまでにもわかってなかった」とよくわかるようになる。インドの人は上手にオックスフォード・イングリッシュで話す。し

かし、頭の中は異文化。(笑)

**赤松**●そう、ほんとうにそう。**シュタンツェル**●植民地であった国はみんなそうかもしれない。

### 積極的な外国人と出たがらない日本人

**内田**●さきほどは、多様な人と多く出会うことの重要性が話題になりました。そういうなかで京都大学の学生、これから京都大学に入学する学生たちが異文化に好奇心を抱いたり、留学生を受けいれたりするときのポイントについて、一言いただけますか。

**赤松**●京都大学も、国際交流のプログラムをいろいろ用意していて、若い学生がさまざまな異文化にふれる機会をつくっています。この夏もオックスフォード大学に三三名をサマースクールで送りだし

ました。飛行機代は本人負担ですが、一か月間の滞在費や授業料は大学が負担するプログラム。すこしめぐまれすぎかな。**内田**●本人がどこまで異文化への好奇心をもつて国際交流



京都大学留学生ラウンジ「きずな」では、毎月日本の伝統文化を体験するイベントを開催。生け花や書初め、相撲体験など日本文化を学び、交流を深める



京大卒業後38年ぶりに訪ねた合気道部の練習道場。大先輩を迎えて緊張気味の後輩たちを前に、「私は京大で古典文学など多くのことを学びましたが、もっとも身についたのは合気道ですよ」と和ませた

在学当時とはすっかりさまがわりした中央食堂を訪問。「安くて、おいしい定食を目当てによく通いましたよ」と20歳代を懐かしむ



できるのが難しいところですね。  
赤松●多様な専門分野から選出されて  
いますが、英語の点数が選抜のいちば  
んの条件になりますからね。

シユタンツェル●優れた学生は、強い好  
奇心をもつとは決まっていない。

内田●京都大学をめざしてやってくる留  
学生たちの学ぶ意欲は強いですか。

赤松●強いと思います。優秀な学生がき  
ていると聞きます。

内田●そういう留学生と在籍している  
学生との交流がすすむば……。

赤松●それがなかなかむずかしい。機会  
はつくっているのですが。

シユタンツェル●教室での留学生と日本  
人学生との交流はどうですか。

赤松●授業によりですね。私がいいたイン  
ド古典学の研究室は、日本人教授のほ  
かに二人の外国人教授。学生には、中  
国人やドイツ人、フランス人もいて、日  
本人もいっしょに諸言語入り乱れて  
ます。そういう教室もあります。だけ  
ど、日本人の学生に日本人の先生が日  
本語でという授業も多い。でも、これ  
からは英語の授業も増えてきますよ。

**世界を一つの文化にする  
グローバル化の功罪**

内田●大使、京都大学あるいは日本の大  
学生へのメッセージ、若い人に伝えた  
いひとことをお願いできますか。

シユタンツェル●やはり好奇心がなけれ  
ば、いつまでもなにか足りない感じが  
すると思います。この世に満足できな  
いはず。私たちは異文化とつきあ

うと、たくさんのごことを得ることがで  
きます。異文化との出会いはすごく高  
い価値をもたらします。それはフィリ  
ピンやインドの考え方や暮らしを研  
究してもおなじだと思えます。

内田先生が研究されている人間の  
精神のしくみ、それも異文化の一つで  
あると思います。それには高い価値が  
ある。いつぼうで、グローバル化によっ  
て世界は一つの文化になろうとする  
過程にある感じがします。しかし、み  
んなが類似した文化になると、異文化  
との出会いから得ている価値が小さ  
くなってしまふ。

一月に初めてミャンマーに行きまし  
た。新しいショッピングモールができ  
ていて、みなさんが、「そこに行きな  
さい」と勧める。それで妻と出かけたら、  
バンコクのショッピングモールと雰  
気も品ぞろえもおなじ。H&M、ユニ  
クロ、アディダス……。

グローバル化の一つの結果として、  
それぞれの文化の特性が薄くなって  
いる。すると、われわれが異文化から  
得るものも薄くなる危険がある。この  
ことを、異文化と出会うことができる  
若者たちが考えてほしい。

**常識を破壊して  
自由な世界を創造する**

清水●東南アジアでも、経済発展にと  
なうグローバル化はすすんでいる。ショッ  
ピングモールも映画のシネコンも、ど  
こもおなじです。けれども、そういう  
均質化がすすむとともに、逆に自分た

ちの文化、アイデンティティを意識す  
るようになっていっていると思うのです。

たとえば、インドネシアやマレーシア  
のイスラームの女性がヴェールをかぶ  
る習慣は、八十年代に急速に広がった。  
そのころから経済が発展して、マクドナ  
ルドがはいつてくると、彼女たちも  
おなじように楽しむ。だけどというか、  
だからというか、自分が何者なのかを逆  
に強く意識しはじめる。

シユタンツェル●それは重要ですね。ポ  
ジティブなメッセージですね。

清水●グローバル化がすすむなかにおい  
ても、あるいはすすむからこそ、それ

ぞれの国や民族は、自分たちの文化を  
意識する。つまりは、日本にとってイ  
ンドネシアが異文化である関係は  
ずっとつづくと思う。しかも、異文化を  
深く知ること、個人が自由になれる。  
自分の生活や考え方が豊かになっ  
て広がる。外の世界を、異文化を知らな  
ければ、生まれ育った社会の小さな常  
識に閉じこめられて自由になれない。  
シユタンツェル●自由になる方法の一つ  
の道がそうですね。

清水●自分とちがう人に会う。別の世界  
を見ることもたらず世界。

シユタンツェル●自分の世界が大きくなる。  
清水●自分が経験したこと、見たことが  
自身の核になる。そういうことをいま

の若い人、京都大学の学生たちもぜひ  
経験してもらいたい。大使を見ならい  
なさいと、声を大にして言いたい。(笑)

赤松●ほんとうにそうですね。

内田●きょうはありがとうございました。

2013年10月25日(金)  
京都大学百周年時計台記念館2階 応接室にて

\*シユタンツェル氏はこの座談会から6日後の10月31日に駐日  
大使を退任されました。本誌の発行時(2014年3月)の肩書き  
とは異なりますが、敬称などは収録時のまま掲載いたします。

私たちは互いにだれかの判断や行動に影響を受けながら生きている。この人間社会のあり方をプレイヤーが一定のルールのもとで行動するゲームととらえ、個人や企業、組織や政府の意思決定のメカニズムを解明するのが「ゲーム理論」。20世紀半ばに確立し、サッカーのペナルティキックや生物の進化戦略、ビジネスの分野にまで広く応用されている。なかでもミクロ経済学との関係は深く、メカニズムデザイン(制度設計)の分野では、公立中学の学校選択制度やオークションの設計など、具体的な政策としての実用性も認められている。今井晴雄教授の研究チームは、ミクロ経済学の分析手法を駆使して、気候変動をめぐる国際交渉の枠組みとその成果を検証している

二〇一三年一月にポーランドのワルシャワで国連気候変動枠組条約(UNFCCC)の第二九回締約国会議(COP19)が行なわれた。二〇一〇年以降の国際的な取り組みについての協議が継続されたのだが、先進国に法的に削減義務を課す「京都議定書」とは異なり、各国が自主的に宣言する温室効果ガス排出削減目標によって気候変動に対処するという既定路線のまま、詳細は未決定である。

これは、削減活動についてはこれまで無制約だった途上国に対して「意味ある参加」を促進する点では前進であるが、先進国の削減は法的義務でなくなるかもしれないという点では、後退したことになる。とくに、価格がゼロちかくに低下し取引も停滞して、すでに崩壊状況にある排出量取引市場については、「回復のチャンスが見えない」という点で、環境ビジネス関係者などの評価は分かれるであろう。現在の国際的論点は、目標を義務化することよりもむしろ、目標達成のための資金・技術援助の供与のあり方に加えて、各国の目標達成度を相互にどのように検証できるかが中心となってきた。

ゲーム理論で  
京都議定書の  
実効性を検証

環境経済の研究のなかで「ゲーム理論」による分析が脚光を浴びたのも、京都議定書の採択であった。ゲーム理論は、利害が対立するなど、相互に影響しあう人びとの合理的な行動を調べるために開発された、応用数学の一分野である。ゲーム理論には、各個人が自分の利益だけを考慮して行動することを前提とした「非協力ゲーム理論」と、複数個人

経済研究所

ミクロ経済学の理論で  
地球環境問題にせまる  
拡大するゲーム理論の応用分野

今井晴雄  
教授

図1 排出削減をめぐる2か国の行動とメリットの比較 (一例)

相手の選択	排出抑制	排出放任
自国の選択	<p>● 生産利益 .....自国にとってのメリット(+)</p> <p>● 環境損失(排出量の総量) .....自国にとってのデメリット(-)</p> <p>数値 ..... トータルスコア</p> <p>排出抑制 0</p>	<p>排出放任 -2</p>
<p>排出抑制 1</p>	<p>排出放任 -1</p>	

「生産利益」は、自国が排出を放任すれば増え、抑制すれば減る。いっぽう、「環境損失」は、排出を放任する国の数に比例するとしてみよう。●や○の数はさまざまなパターンがありうるが、この図では、結果が「囚人のディレンマ」\*6のモデルになる例を挙げている。メリットを比較すると、相手が抑制するならば自国は放任するのがベスト(0<1)。相手が放任する場合も、自国は放任するのがベスト(-2<-1)。相手がどちらの場合でも放任するのが最適で、相手も同様である。しかし、トータルスコアでは、2か国が「ともに放任」するよりも「ともに抑制」するほうがまし(0>-1)という結果になる。

て「提携」とよぶ。非協力ゲーム理論を用いて、提携の形成を説明しようとするのが提携形成理論であり、カルテル(産業界内の企業グループによる協調行動)の形成の説明などに成功している。この理論を援用して、バレットやカッラーロといった研究者は、京都議定書で一部の国のみが削減義務を負うという結果が説明できると主張した。身近な例におきかえてみると、たとえば、コミュニティのみんながそれぞれに美観を保つ努力をすれば、全体の美観が保たれ、資産価値もよくなる。しかし、これを計算してみると、ケースによれば他人にとってのメリットは他人だけが享受し、自分の努力は自己負担になるため、自分の利益の範囲でしか努力は行なわれず、過小努力によってコミュニティ全体が相対的に損失を被るかもしれない。

◎いまい・はるお

専門は、ミクロ経済学、ゲーム理論、環境経済理論。1949年に京都市に生まれる。1974年に京都大学大学院経済学研究科修士課程修了。1978年にスタンフォード大学大学院経済学研究科数理経済学Ph.D取得。南カリフォルニア大学経済学科講師、助教授、京都大学経済研究所助教授をへて、1991年から現職。共著に「ゲーム理論の新展開」、「ゲーム理論の応用」(勁草書房)がある。



前述のような状況で、一部の人のみでなく、「互いにより努力をしよう」という協定を結んで相互に監視を続けることにすれば、自分たちにもメリットが生まれるかもしれない。もちろん、これに協力しないアウトサイダー（フリーライダー）はもつと得るのである。京都議定書の枠組みにおいても、自己利益の計算に基づいた国家の行動を前提としても、国連のような約束を管理する場があれば、このような部分的な協力が実現されることが理論的に示された。これはミクロ経済学での「公共財のただ乗り」でもあり、ゲーム理論での著名な「囚人のディレンマ」の変形でもある（図1）。

その後続研究は、EUなどの協力推進派の支援も受けて、広範囲に展開されている。われわれの研究グループの一部でも、数値シミュレーションを用いて、どのような国々が部分的に協力すればパフォーマンスがよくなるかなどを調べている。

### COP4参加をきっかけに 環境経済理論の世界に

一九七十年代以降、非協力ゲーム理論への関心がミクロ経済学において高まった。その援用によって、利害が相互に依存する状況や、情報が不確実であったり、また、人びとの行動が将来に影響しあうような動学的状況の分析のためのツールとして、非協力ゲーム理論は広く用いられるようになった。

私がまだ京都大学の学部生であった一九七〇年ころには、ミクロ経済学の教科書でのゲーム理論についての言及は少なく、担当したゼミの発表ではその話

題を飛ばしてしまつて、期待していた上級生の響きを買ったことを覚えている。一九七四年にスタンフォード大学に留学してから、指導教員のクルツ教授のもとで、なかば強制的にゲーム理論を勉強させられたことが、現在につながっている。いまや、ゲーム理論は、サッカーのペナルティキックの戦略から生物の進化に至る広い分野で用いられ、経済学では、携帯電話の料金設定から、中世地中海貿易の制度解明にまで応用されている。とくにゲーム理論の応用が肝となるのは、ミクロ経済分析のなかでも制度設計に関わるメカニズムデザインという分野である。オークションの設計から学校選択制度に至るまで、幅広く実用に耐える案が出されている。

私は、COP3で京都議定書が採択された一九九七年当時にはまだ、環境問題に縁はなかった。会議の牽引力であった米国ゴア副大統領を乗せたヘリコプターが京大キャンパスの上空を通過するときは、ただの騒音としか思わなかった。ところが、その翌年に、京都大学経済研究所の佐和隆光所長のプロジェクトに加わり、環境省の検討会や、ブエノスアイレスのCOP4に参加するようになった。これをきっかけに、当時のメンバーの一部とは現在も協同研究を続けている。

ミクロ経済学は、分野外の人からはいささか想像しにくいであろう。GNP、景気や財政金融政策といった一般に聞きなれたトピックがあまり登場しない分野である。需要と供給によって価格と生産、消費量が決まるという市場のロジックを、

その背景を深く掘り下げることで体系化するという方向に発展していった。

たとえば、企業が外部から部品を調達したり、ときには自社生産したりするように、市場取引を用いるか、組織内での取引で済ませるかという選択肢がありうる。ミクロ経済学では、これらの選択を含めて分析することから、市場に変わる仕組みの長所短所を比較できるような体系が開発されてきた。その成果が、メカニズムデザインとよばれる理論であり、ゲーム理論もその重要な礎石となっている。

### ミクロ経済学の理論家が指摘した 排出量取引の問題点

われわれは現在、気候変動をめぐる国際交渉の経過と、決定事項がどの程度実行されているかを調べている。とくに、京都議定書に盛り込まれた京都メカニズムとよばれる国際交渉の経過や、クリーン開発メカニズム(CDM)などの経

済メカニズムの実態と、その運用規定がもたらす影響のチェックを行なっている。

二〇一二年までは日本も削減義務を負っていた京都議定書では、削減の費用負担を軽減するために、より費用の低い国から削減量(クレジット)を購入する排出量取引など、いくつかの経済メカニズムが取り入れられた。なかでもCDMは、削減義務を負わない途上国での個別の排出削減プロジェクトから得られたクレジットを、義務を負っている先進国が購入して目標達成にカウントできることが特徴的な仕組みであった(図2)。

じつはこのCDMは、京都議定書の最終案の取りまとめの土壇場に議定書に盛り込まれたため、内実が詳しく詰められないまま採択された。二〇一〇年のマラケシユ合意で運用細則が決定されるまで、その実態は明確ではなかった。にもかかわらず、このCDMを導入することによって、先進国のみが削減義務を負う枠組みであっても、先進国からの資金

図2 クリーン開発メカニズム(CDM)



#### \*1 第19回締約国会議(COP19)

2013年11月11日に開幕したCOP19は、先進国と途上国の利害がぶつかり合い、会期を1日延長し23日夜に終了。すべての国が参加する2020年以降の新しい国際枠組として、各国が温暖化ガス削減の自主的な目標を導入するというこれまでの合意事項を再確認した。

#### \*2 京都議定書

正式名称は、「気候変動に関する国際連合枠組条約の京都議定書」。1997年12月に国立京都国際会館で開催されたCOP3で採択。2008年から2012年までに、EUや日本をはじめとする先進国全体で温室効果ガス6種の合計排出量を1990年比で5%削減することを定めたが、現実には限られた国だけが削減義務を負う特徴をもつ。

#### \*3 温室効果ガス

大気圏にあって、赤外線の一部を吸収することで温室効果をもたらす気体の総称。京都議定書での排出量削減対象は、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)、メタン(CH<sub>4</sub>)、亜酸化窒素(N<sub>2</sub>O、一酸化二窒素)、ハイドロフルオロカーボン類(HFCs=代替フロン)、パーフルオロカーボン類(PFCs)、六フッ化硫黄(SF<sub>6</sub>)の6種類。

導入で途上国での排出削減が推進でき、先進国は自国よりも安い費用で削減に貢献できるというふれこみであった。

他方、その実施にあたっては、実際の排出量を測定し、途上国内でプロジェクトが実行されなかった場合の「仮説的な排出量」と比較して、その差分を実削減量（ベースライン）として、譲渡可能なクレジットとする。したがって、どのようにしてこの（CDMが行なわれれば観察不可能になってしまう）仮説的削減量を決定するかが課題となる。CDMの導入にあたっては、不用意にクレジットを発行してしまうことによる環境面でのリスクと、そのことによってビジネスとして実行しにくくなるという、CDMがそもそも抱えている相反する課題が挙げられていた。

このベースラインの具体的数値の算出方法として、一定量の排出水準で与えられる「絶対量方式」を想定していた研究者が多い。他方で、外交交渉担当者や経営者などの実務家からは、「相対方式」が提唱されていた。これは、生産活動からの排出削減の場合であれば、ある技術を採用したと仮定し、鉄なら鉄を二トン生産することから発生する排出量（排出係数×実際の生産量）でベースラインを求めるという方法である。

これをもとに、われわれのようなミクロ経済学の理論家は、「絶対量方式」だと、生産量を変えられる場合には、プロジェクトの企業には生産量を下げ、インセンティブが発生し、逆に「相対方式」だと生産量を上げる、インセンティブが発生

することを指摘した。さらに、どちらの方式を選ぶかによって、企業収入の不確実性の違いが変わりうることも指摘して、注意をよびかけていた。

二〇〇五年ころに実際にCDMが始動すると、排出係数基準を用いる相対方式が大半となり、かつ、生産量には過去の実績等に基づく上限が設けられる場合が多かった。メカニズム理論に基づくわれわれのメッセージは、あるていど伝わったものと考えられる。

### 経済理論を応用し、制度の破綻を予測する

新しい仕組みを導入する際には、データがないために、経済の仕組みを（もっぱら数式で）表現する理論モデルによる思考実験が、いちばん手軽な試行機会となる。人や企業を、嗜好や利潤など、「自分のインセンティブによって動く者」ととらえる経済理論では、CDMのような経済メカニズムでは、此細であっても有利さを見いだせるような可能性があれば、そこに集中的に労力が費やされて、結果的には制度そのものを危うくすることを、経験もふまえて、示唆する。

CDMの始動後の出来ごとは、まさにそのような事例を示す。まず、取引の対象となる温室効果ガスは二酸化炭素だけではなく、他に五種類のガスを、温暖化への寄与度に応じて換算できるものと規定している。エネルギーコスト節約になる二酸化炭素の削減と比べれば、これらのガス削減は経済的メリットがなかった。ところが、CDMの始動後は、それが突然に有用なものに変わった。なか

でも代替フロンとよばれるガスは、二酸化炭素換算率がとても高いうえに、その破壊は安価で簡単であった。結果として、CDM発足当初の数年間は、代替フロンの破壊が削減量の過半数を占める事態となり、現在でも累計の削減量なかでは群を抜いて高いプロジェクトとなっている。

同じく発足前の予想が外れたものがある。CDMは先進国からの投資によるものが基本で、技術移転や能力開発にも寄与すると考えられていたが、かなりの比率で、途上国自身の投資によるプロジェクトが登録された。中国やインド、ブラジルなどの中進国のプロジェクトが大半を占め、アフリカなどの最貧国のプロジェクトがあまりない極端な結果となっている。ほかに、メカニズムの運営が遅延気味であることや、虚偽申告の見逃しや検証機関の手抜きなどのスキャンダルが指摘された。

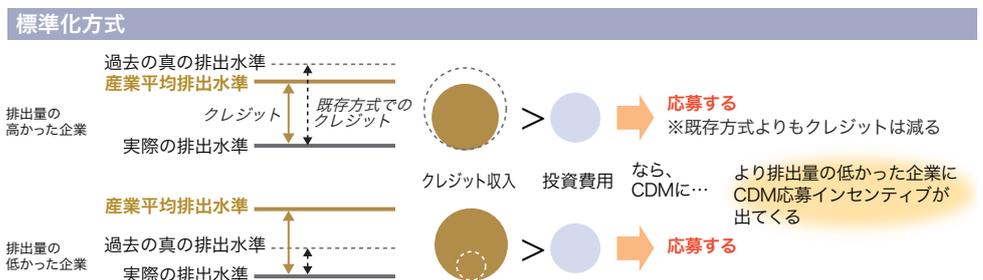
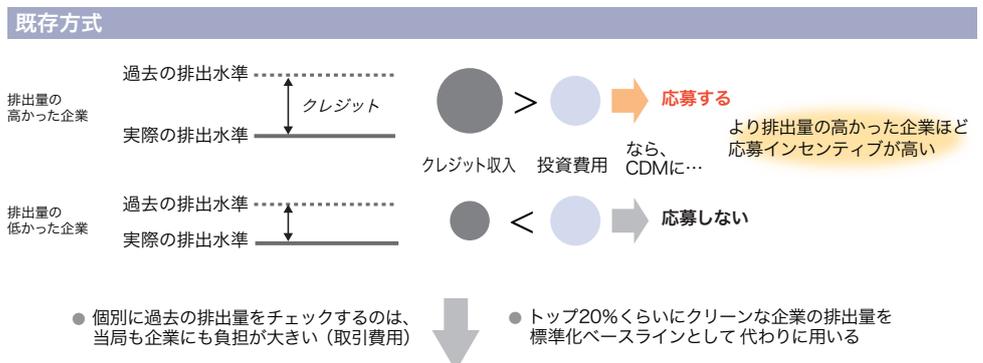
これらの反省もあつて、二〇一三年以降は、CDM改革の議論が進められる一方で、新メカニズムとよばれる新しい方式で途上国での削減を促進する経済メカニズムの検討が盛んである。ほかに、京都議定書外の仕組みとして、議定書に参加していない米国などが熱心に取り組んでいる森林関連メカニズムを中心、すでに動き出しているものもある。

### CDM改革の具体策を理論面から検証する

以上の状況下での新メカニズムの機能チェックが、現在の理論研究の重要課題である。CDMについては、新規プロジェ

図3 インセンティブによる行動の違い (Hayashi-Michelova論文など参照)

※新プロジェクト投資で排出量が下がる場合



クトの応募が当然ながらストップしている。別の見方をすれば、よい「反省の時期」を迎えているとも言える。

CDM改革については、「なんらかの私たちで、応募や審査に関わる取引費用を下げろべき」というビジネス界からの要求にこたえるべく、いくつかの提案が検討

	個別設定 ベースライン	標準化 ベースライン
排出量の高かった企業	多いクレジット →CDMに応募	クレジットは減る →CDMに応募
排出量の低かった企業	クレジット0 →CDMに不参加	クレジットはプラス →CDMに応募

想定排出量をうまく設定すれば、クレジットの増減は相殺されて、環境への悪影響は避けられる？

現行案：既存方式と標準化方式を併存させ、応募者が選べる

	個別設定 ベースライン	標準化 ベースライン
排出量の高かった企業	多いクレジット →CDMに応募	選ばない
排出量の低かった企業	選ばない	クレジットはプラス →CDMに応募

クレジットはかならず増加し、世界の総排出量は増える

結果としてクレジットが増えるプロジェクトと減るプロジェクトが出現するが、増減が全体として相殺されるなら、環境への悪影響は避けられると議論さ

されている。その内容について、理論家の視点からは、いくつかの問題点が指摘されている。排出削減量の計算方法を簡単にするため、プロジェクトごとに個別に想定排出係数(個別設定ベースライン)を求めたのではなく、その国での実際の生産活動を排出係数の低い方からリストして、生産量の合計が二〇パーセントに達する生産活動の排出係数を「(産業平均による)標準化ベースライン」とする方式などが提案されている。この場合、もともと排出係数の高かったプロジェクトでは、実質削減量の計算基準が不利となり、逆に、すでに排出係数の低かったプロジェクトには、多めに削減量が付与されることになる(図3)。

CDM改革に関するわれわれの研究内容は、政策オプションとしての仕組み

### 数式の世界が現実社会をうごかすとき

れる。しかし、はたしてこの方式で取引費用は軽減されるのだろうか。また、応募者が既存の方式か標準化方式かを選べるとなると、得する事業者だけが後者を選ぶことになって、「相殺は発生しない」ことなどが指摘されている(図4、5)。もし取引費用が軽減されるのなら、これまで取引費用の高さを理由に応募を諦めていたプロジェクトが増加するはずである。そもそも、京都議定書の本来の目的が、「より低いコストで、与えられた削減量以上を実現すること」であるとする「相殺されるからよい」という基準では、仕組みの比較評価はできない。われわれの研究チームは、この点を指摘しようとして準備している。

マイクロ経済学の仕事は、基本的には定義—定理—証明という数学のスタイルで表現される地味な作業である。しかし、いわゆるノーベル経済学賞のおおよそ半分は、マイクロ経済学ないしは経済理論に対して与えられており、その基礎としての重要性は十分に認知されている。さらに、近年では、その実用性も

の比較である。これは経済学による政策手段の検討というごくごく伝統的な課題であるが、制度設計という要素を含んでいることから、メカニズムデザイン論の分野とも共通性をもつ。われわれの研究はさらに、国際交渉の枠組みと、その交渉結果に与える効果の検証を含んでいる。このような視点から、経済メカニズムのもつ機能を再検討することが当面の課題である。

さらに、既存研究と視点を変えて、国際交渉をCDMなどを含んだかたちで理論モデル化して、その定性的な性質を調べるために、われわれはゲーム理論の交渉モデルを用いる。

将来(二〇五〇年や二〇二〇年)の世界全体での削減目標をいま決定しながら、各国の個別の目標は二〇二〇年についてのみ議論されている。こうしたやり方は、全体の利益を損なうという意味での非効率性が発生しうることは、理論的にはすでに知られている。また、削減義務がなくCDMの利益のみ受け取る途上国に有利なはずと思われているが、はたして、じつさいにはどうなるのだろうか。私たちの当面の目標は、こうした課題の検証にある。

\*

#### \*4 ミクロ経済学

基礎経済学には、国家や国民、市場など、大きな視点で経済のメカニズムをとらえる「マクロ経済学」と、個人や企業などの個別的な経済活動から市場のメカニズムを微視的に分析する「ミクロ経済学」とがある。ミクロ経済学は、財の価格(物価)の変化のメカニズムとその影響を受ける市場のプレイヤー(生産者、企業、消費者、個人)の経済行為を分析する学問で、市場メカニズム(価格メカニズム)を中心に理論を形成してきたが、近年では、制度や組織の研究へと対象を拡大している。

#### \*5 公共財のただ乗り

公共財とは、たとえば公園や道路、安全(警察の存在)など、人びとが共同で享受できる財やサービスのこと。供給のための費用を負担していない人も便益を受けられるという性質をもつ。対価を支払わずにサービスを利用する人を「ただ乗りする者(フリーライダー)」とよぶ。

#### \*6 囚人のディレンマ

囚人のディレンマとは、互いに協力するほうが裏ぎりあうよりもよい結果になることがわかっている、全員が自身の利益を優先している状況下では、互いに裏ぎりあってしまうというモデルを示すゲームの例。この状況を、自白を求められる2人の囚人の状況にたとえて、「囚人のディレンマ」とよぶ。

#### \*7 森林関連メカニズム

森林に関連して排出削減をめざすメカニズム。おもなものに「REDD+(プラス)」がある。途上国において、植林や再植林ではなく、森林減少、森林劣化を減らすことで排出削減するという考え方(REDD)に、森林保全や管理もふくめて排出削減を実現するという考え方をプラスしたもの。



COP19に参加する今井教授(最後列)。「現場で生の議論に耳を傾けることに意味がある」と、1998年のCOP4への初参加以降、開催地に頻繁に足を運んでいる

随所に認められており、われわれは、地球環境問題でもその威力がさらに発揮されるようにめざしている。

子どもが書くよ  
うなもこもこし  
た雲がよい雲だ  
という。機体は  
京大所有のもの



## 一秒でも長く！ 天気を読んで、 空を舞う

●グライダー部

◎主将・谷一慶亮さん  
(工学部物理工学科3回生)



東海・関西学生グライダー競技会のトロフィーを手にする谷一さん。個人戦、団体戦ともに準優勝を獲得した

「父」が作ってくれたゼロ戦のプラモデルを見て、かっこいいなって。子どものころから飛行機が好きで、いつかは空を飛びたいと思いつづけてきた谷一慶亮さん。京大グライダー部への入部は、なかば必然だった。

主将として挑む2014年春の全国大会にむけて、合宿練習を重ねている。大会の花形は、指定コースをまわる速さを競う「周回競技」。「もちろん優勝をめざしています」と谷一さんは迷いなく言いきる。

グライダーは「エンジンのない飛行機」で離陸させるのはひと苦勞。「たこあげのように、グライダーにつないだワイヤーをすばやく巻きとって急上昇させるんです。関西には離陸に必要な長い滑走路がないため、週末は岐阜や長野の滑空場まで出向く。「練習の日数は限られているので、どれだけの回数を飛ばせるかが重要です。飛ばしたあとも休まず、つぎの機体を人力で離陸位置まで移動させてワイヤーを装着します。空に昇ればひとりの世界でも、じつはチームワークが必要なんです」。



合宿練習中の部員たち。機体の整備や修理も部員たちの仕事

パイロットも、離陸してからがいそがしい。「つねにきよろきよろと天候を読んでいます。上昇気流をわたり歩くように飛ぶことでより長く、より速く飛ぶことができるんです」。トンビは上空をくるくる旋回して空高く昇ってゆく。「ぼくたちもおなじように上昇気流をさがしています」。風や雲がなく、鳥が飛んでいるよい天候だと、長ければ5時間も飛びつづけることができるそうだ。

天候を読むくせは抜けない。「空を見上げると、『飛べるかな、どのくらい滞空できるかな』って考えてしまう。京都のまちを歩いていても、好条件の日には、飛びたくなくてうずうずします」。

あこがれの空を舞う、その心境は、「一秒でも長く飛びつづけたい。もう着陸したくない。いちど経験したら、きっとやみつきになりますよ」と目が輝く。その熱い語り口にひきこまれる。私は高所恐怖症であることをすっかり忘れ、コクピットに座って空に飛びたく自分を想像していた。

\* <http://www.kusu.kyoto-u.ac.jp/~glider/>

学生たちの活躍

邁進・京大スピリット

## 「かるた脳」の仲間とすごす 「いま」がだいじ

●かるた会

◎代表・池谷 涼さん  
(理学部2回生)



あ いにくの雨、和室の入口に  
は傘が次つぎに増えてゆく。「かるた競技者が『かさの札』とよんでいる取り札があるんです。『傘』って聞くと右手が反応してしまう。もうすっかり『かるた脳』です」。練習中の部員から笑いがもれる。

競技かるたは、小倉百人一首の取り札をはさんで2人が対座し、上の句を聞いて、下の句の書かれた50枚の札を取りあう競技。「かるたあそび」とはわけがちがう。上の句の冒頭の数字に反応して即座に動くための瞬発力や上半身の激しい動きから、「畳の上の格闘技」とも称される。「柔道部の前では言えませんけど……」と笑うが、池谷涼さんもその激しさに惹かれた。きっかけは競技かるたをテーマにした漫画『ちはやふる』。「漫画だからかなり誇張していると思っていたら、あのまんまでした」。全札暗記はもちろん、自陣の札の配置や送り札になにを選ぶかなど、戦略を練る頭脳も必要。「どの札がいつ読まれるのか、運の要素もあります。だから奥が深い」。

競技かるたの大会は段位に応じてA級からD級まで4つに分かれる。一定の成績を収めれば昇段・昇級できるしくみ。創部15年の京大かるた会は、2012年夏、高校生から社会人まで参加する「全国職域学生かるた大会」A級で初優勝。応援席で見守った試合を池谷さんは忘れられない。優勝杯をかかげる姿にあこがれ、「偉大な先輩方に追いつきたいです」と背筋を伸ばす。

「趣味は数学」という池谷さん。「将来のことは大学院に進んでから考えます。でも、数学で就職できるのかなあ」。のんきなつぶやきに、仲間たちはひと笑い。「とにかく、かるたが楽しいんです」ということばに賛同して大きくうなづく部員たち。「雑談していても、あることばに同時に反応してしまったり、結局はかるたの話になるんです」。池谷さんには仲間とすごす「いま」がだいじ。わきあいあいとした和室の雰囲気は、練習がはじまると一変。真剣な面持ちで札を見つめ、読み手が息を吸うその一瞬、空気はぴんとはりつめた。

注 「かささぎの 渡せる橋に おく霜の 白きを見れば 夜ぞ更けにける」中納言家持



←毎年新しくつくられる京大かるた会のユニフォーム。左肩には背番号が印されている

▶試合形式での練習が主。一時間半にもわたる試合には、集中力も必要



\* <http://boiler.yu-nagi.com/>

## あふれる思いを 被災地をささえる力に

●東北復興支援  
学生ボランティア

◎谷崎佑磨さん  
(法学部3年生)



↑気仙沼高校での座談会。受験や大学生活について、生徒からの質問がとぶ



→第1回からつづく、フィールド科学教育研究センター・畠山重篤社会連携教授が営む牡蠣養殖場での支援の様子

京都大学東北復興支援学生ボランティアは2011年の夏にスタート。以降、春と夏の長期休暇に約25名の学生を派遣。支援活動に従事する労働ボランティアと、京大の研究活動の一環で水質・土壌調査にたずさわった研究ボランティアが1週間を被災地で過ごす。労働ボランティアとして初回から参加している谷崎佑磨さんは、この活動のリーダー的存在だ。

現地の方がたとの交流をつうじて埋もれたニーズを発掘し、支援内容を企画する。2012年春からつづく気仙沼高校への教育支援は谷崎さんが中心となって運営。高校に出向き、授業や座談会を開いて進学相談にのる。周辺に大学のない気仙沼高校では、現役大学生の本音を聞ける機会とあって、進路選択を控える生徒たちに好評だ。2013年春からは、「生活に精一杯で休んでいた農業を、そろそろ再開したい」との声をうけ、農地再生の支援もはじめた。

活動場所の一つ、気仙沼市西舞根の海の写真を指さしながら、「この海はほんとうにきれいなんです」。震災当時の荒れたすがたを想像できないおだやかな海だが、最初に目にしたげれきの山を、谷崎さんは忘れられない。「復興はすすんでいるようにも見えますが、

一人ひとりの暮らしに目をむければまだまだこれから。

思いの裏には「後悔」がある。東日本大震災が起こったのは、京都大学の合格発表翌日。「4月から京大生だ！ とうかれています。被災地への思いはあったけれど、一歩が踏みだせなくて……」。心のすみにたまっていくモヤモヤは、夏休みを迎えた谷崎さんを現地へと駆りたてた。

「被災地に行った人のことばは、情報量と重さがちがう」。強まる語気に、ニュース映像や新聞の情報だけで「わかったつもり」の自分をみすかされたようでドキっとする。「現地に立って体で感じてほしい」との思いから、ボランティア活動の情報発信にも力をそそぐ。「伝えたい」という気持ちは、次つぎとあふれでることばにのりうつる。

被災地の方から、「前にも来てくれたよね」と声をかけられたことが忘れられないという。大阪に生まれ育った谷崎さんにとって、東北は特別な場所になりつつある。「卒業しても、東北にはずっとかかわって、あの海を見つづけたい」。その目は、はやくも東北へ向かう春を待ちわびているようだった。

＊ <http://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/kesenuma>  
＊ <https://www.facebook.com/comeback.oyster>

## 「好きこそものの上手なれ」。 のめりこんでしまった 研究の世界

●2012年度京都大学総長賞

◎前迫真人さん

(大学院医学研究科人間健康科学系専攻  
博士後期課程3年生)



論文が認められ、世界中の人に読んでもらえる喜びを体感した前迫さん。未知への探究心をエネルギーに研究者として新しいフィールドへの一歩を踏みだす

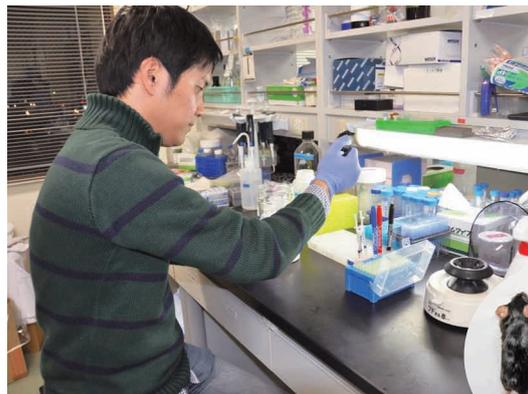
日本の平均寿命は82.9歳。加齢とともに発症のリスクが高まる「認知症」。脳の神経細胞が減り、記憶障害などが起こる病気だ。前迫真人さんの研究チームが取り組むのは、認知症のなかでもっとも多い「アルツハイマー型認知症」。いちど発症すると根治はむずかしいが、ここ数年で研究が進み、発症の20年も前に脳内で変化がはじまるとわかってきた。「だから、予防が重要なんです」。

加齢や遺伝のほか、生活習慣病もアルツハイマー型認知症の危険因子の一つ。その予防の鍵は食事と運動といわれている。前迫さんの研究チームはその効果を確かめるべく、アルツハイマー病モデルマウスをもちいて基礎研究を重ねてきた。高カロリー食を与え、アルツハイマー病への変化の促進を確認したところで、食事を改善したり、運動をさせて、その効果を比較した。「脳の機能障害に限っては、運動のほうがより改善効果が高いとわかりました」。この論文は米国生化学・分子生物学会誌『ジャーナル・オブ・バイオロジカル・ケミストリー』に採択され、

2012年のペーパー・オブ・ザ・イヤーに選ばれた。

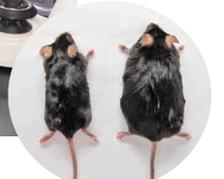
「わかっていないことを世界で最初に解きあかせる。その最先端にいられるのがおもしろい」と研究にのめりこむ前迫さん。ほっとできるのは、家族と過ごす時間。「6か月になる子どもがいるんです」と顔がほころぶ。つられてこちらにも温かい気持ちに。白衣を脱げば一児のパパだが、研究者としての性分は子育てにも顔をだす。育児書や奥さんから「○○にはこれがない」といわれても鵜呑みにできない。「ほんとうかって、ついつい疑ってしまうんです」と笑う。

2014年3月に大学院を修了し、秋からは家族とともに渡米。ハーバード大学の博士研究員としてアルツハイマー病研究をつづける。「目標は研究グループのリーダーとして生きること。ただ、どんなに偉くなっても、実験室で手をうごかしつづけて、サイエンスの最前線にいるよろこびは忘れずにいたい。『好きこそものの上手なれ』といいますが、研究を好きでいることがだいじですね」。



←扱うのはマウスの脳サンプルやDNAなど。日々、地道な作業を続けている

↓脂肪分の多いエサを与え、太らせたマウス(右)と通常のマウスの比較



# 授業に潜入! 「おもしろ学問」講義録

全学共通科目 人文・社会科学系科目群  
「教育学Ⅴ」  
〈吉田南総合館北棟2階 26号室〉

## 「個性重視」の 社会的背景



### 小山 静子

京都大学大学院人間・環境学研究所 教授

「ゆとり教育のせいで学力がおちている」、「最近の親は、きちんと子どもを育てていない」。メディアにあふれる教育の言説をうたがうことなく受けいれてはいないだろうか。だれしもが教育を受けた経験があるゆえに、当事者として「わかっているつもり」で話すことができるのが教育論。「ほんとうにそうでしょうか」と小山静子教授は、声を抑えて静かに問う。日本の高校生の3分の1は家庭での「勉強時間はゼロ」、経済的に苦しくて教育どころではない家庭もある。政治や経済、家庭環境など、教育と子どもをとりまく状況の変化をとおして、教育がかかえる問題をあぶりだす

#### 授業計画

1. 1970年代までの教育状況
2. 教育問題の社会問題化
3. 臨時教育審議会
4. 高校教育の多様化
5. 学校選択制度
6. ゆとり教育がめざしたもの
7. 家庭教育への関心の高まり

#### \*1 臨時教育審議会

1984年8月に中曽根首相直属の諮問機関として発足し、長期的な観点から教育問題を議論した。教育改革の基本的な考え方に「個性重視の原則」、「生涯学習体系への移行」、「国際化・情報化など変化への対応」の三つの原則を示し、1987年8月までの3年間に4次にわたる答申を総理大臣に提出した。会長を務めたのは第19代京都大学総長の岡本道雄。

#### ◎こやま・しずこ

1953年、熊本市に生まれる。専門は日本教育史、家族史、ジェンダー史。京都大学大学院教育学研究科修了後、立命館大学文学部教授などをへて、2004年から現職。著書に「良妻賢母という規範」(勁草書房)、「子どもたちの近代 学校教育と家庭教育」(吉川弘文館)、「戦後教育のジェンダー秩序」(勁草書房)などがある。

臨時教育審議会(臨時教審)は、中曽根康弘首相の在任中に内閣総理大臣の諮問機関として一九八四年に発足した。一九八七年までの三年間ではあったが、四次にわたる答申で、現在の教育改革を考えるうえで避けてはとれない重要な方針をうちだした。その基本原則は、「個性重視の原則」、「生涯学習体系への移行」、「国際化・情報化など変化への対応」。なかでもとくに重視すべきとされたのが「個性重視の原則」だ。

先週は臨時教審が成立したところまで話をしましたので、きょうは答申の基本原則である「個性重視」がどういう背景のもとにうちだされ、どういった問題を含みこんでいるのかということを考えてみたいと思います。

個性化や多様化を重んじるという考え方は、いまでは社会的に共有されていますから、画一的な教育であるよりは、個性を重視した教育のほうがよいということには、さして異論は出ないと思います。ですが、一九八〇年代の後半に、なぜこつこつとこつこつと答申に登場したのか、教育において「個性を重視する」とは具体的に何を指すのかということには、考えておくべき問題だと思えます。臨時教審の最終答申は、「個性重視の原則」は今次教育改革でもっとも重視されなければならない基本的な原則とした」と述べたうえで、「個性重視の原則」について次のように

語っています。①

以前、授業で言いましたように、一九六〇年代から七十年代にかけて、雇用者中心の社会ができていき、多くの人が学歴獲得競争に巻き込まれていきました。学校教育が教育の中心を担うようになっていきました。教育の標準化がすすみ、どこでも似たような教育がおこなわれるようになったわけです。そのような教育のあり方が、ここでは「画一性、硬直性、閉鎖性」ということばで表現されています。それに対してうちだされたのが、「個性重視の原則」です。

臨時教審はなぜ、「個性重視の原則」を重要と考えたのでしょうか。その理由として、次の四点をあげています。②

現状を「画一的」「閉鎖的」なものとみなし、その結果、個人の確立などが充分になされていないと考えられていることがわかります。したがって、その代わりに個性を尊重して、教育を多様化し、個人の選択の機会を拡大することをとおして、「創造性・考える力・表現力」を育てる、という方向性がでてきたわけです。それまでの教育には、どこに生まれ育とうとも、おなじような教育を受けられるという「良き」があったのですが、それがここで

#### 臨時教育審議会第四次答申(最終答申)

##### 第二章 教育改革の視点

本審議会は、二一世紀のための教育の目標の実現に向けて、教育の現状を踏まえ、時代の進展に対応し得る教育の改革を推進するための基本的な考え方として、以下のように考えた。このうち、「個性重視の原則」は今次教育改革で最も重視されなければならない基本的な原則とした。

##### 一 個性重視の原則

今次教育改革において最も重要なことは、これまでの我が国の根深い、病弊である画一性、硬直性、閉鎖性を打破して、個人の尊厳、個性の尊重、自由・自律、自己責任の原則、すなわち「個性重視の原則」を確立することである。この「個性重視の原則」に照らし、教育の内容、方法、制度、政策など教育の全分野について抜本的に見直していかなければならない。

#### 1

#### ←進学率と長期欠席児童生徒数の推移

70年代まで教育の量的拡大が進んだが、80年代以降、長期欠席者が増加に転じており、ここに学校教育という制度がかかえる「問題」の一端が示されている



「創造的人材」が求められるいっぽうで、定型化された単純な仕事大量に生みだされていきます。たとえば、コンピュータへのデータ入力や、コンビニやファストフード店での接客、運搬や清掃、検品などです。短期間の研修を受ければすぐにできるようになり、しかもさほど熟練を要しないこうした仕事がたくさん誕生し、そういう仕事は、アルバイトやパートの人に任せたらよいという発想が生まれています。臨教審の答申はこういうことには言及しませんが、現実には、「創造的人材」となることが全員に期待されているわけではないということも、心にとめておかなければなりません。

2

①我が国の教育は、明治以来の近代化の過程において、効率性を重視し、継続性と安定性を求める傾向の強い教育制度の特質もあって、とすれば画一的、硬直的なものとなり、個人の尊厳、個性の尊重、自主的精神の涵養がなされず、個の確立、自由の精神の尊重等が十分でなかったことを反省しなければならない。しかし、同時に自由は重い自己責任を伴うものであるため、選択の自由の増大する社会にあって、これからの教育は個人の尊厳、個性の尊重を基礎として、この自由の重み、責任の増大に耐え得る能力を育成することが重要である。

②さらに、二一世紀に向けて社会の変化に積極的かつ柔軟に対応していくために、芸術、科学、技術等のあらゆる分野においてとくに必要とされる資質、能力として、「創造性・考える力・表現力」の育成が重要である。(略)

③また、個性を伸ばし、創造的で豊かな心を育てる上で、子どもをとりまく学校や日常の様々な環境条件を改善していくことが必要である。(略)

④今日、社会の成熟化の進展に伴い、人々の意識は個性化・多様化するとともに、選択の自由への要請が大きくなっている。教育においても、国民の教育に対する要求の高度化、多様化に柔軟に対応し、これまでの教育の画一性、閉鎖性の弊害を打破する上で、「選択の機会の拡大」を図ることが極めて重要である。(略)

人それぞれの自由。そして選択の自由には「自己責任がともないますよ」、「その自由や責任の重みに耐える能力も必要ですよ」なんてことも、この答申の文章には含まれています。

「創造的人材」の必要性

このような考え方が出てきた背景には、「創造的な人材」求められるようになったという社会の変化があります。八十年代後半は、いわゆるバブル経済の時代であり、日本が経済大国化した時期です。明治以降からつづく、「追いつき型近代」からの転換がはかられ、情報化社会、グローバル社会への対応の必要性が語られはじめた時期でした。「知の大競争時代」の幕開けでもあり、知識や情報、対人サービスが市場経済の中心を構成するようになり、活用する人材を育成するのが、臨教審では課題として認識されていました。

技術革新がめざましく、膨大な情報量が飛びかう社会では、かつての技術や手法はすぐに古びてしまいます。個別に対応した専門知識や技能は役にたたなくなるし、学歴や資格は有能な人材の指標たりえないという危機感が、経済界などには強く存在していました。政治的な意味でも経済的な意味でも、従来の教育方針で育つ人間では不十分だという認識がわきおこってきたわけです。もちろん、現在もその延長線上にあります。

これは豊かな社会になった結果ともいえます。高度経済成長期には、人びとは大量生産された安くて均一的な商品で満足できていました。しかし、この時代に日本の消費構造は変化し、みんなとおなじものではなく、「私に適した商品」、「私に適したサービス」、そしてそれを選択する自由への欲求が高まった。個性化や多様化を受けいれる基盤がすでにあって、「個性の尊重」

は画一的なものであるとならえ直されており、それを愛えようというのが、臨教審の基本的な考え方でした。

「画一的なもの」を育てたい」と思える状況になっていた。だから、教育を個性に合わせて多様化して「創造的人材」を育てることがうたわれると、「たしかにそう」と認識できたのです。

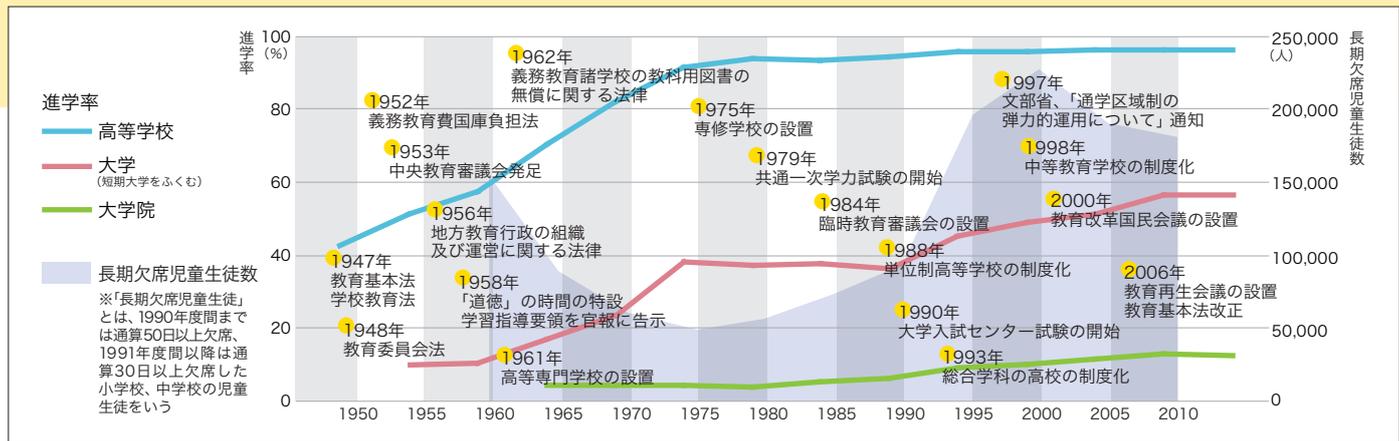
社会が求めているのは、「協調性があって従順で、集団への帰属感や、忠誠心の強い人間」ではなく、「自ら問題を発見し、解決方法を考察できる人間」、「つきあうにはすこしやっかいだけれど、个性的で自立心が強い人間」ということになりました。そういう人材を育てるには、従来の教育では不十分だという認識が臨教審の考え方の背景にはあったということが出来ます。

もう一つ、臨教審のこの主張の背景には、「教育自由化論」という考え方がありました。これは中曽根ブレンといわれる人びとの主張ですが、教育に対する従来の考え方は大きく異なるもので、臨教審のなかでも激しい意見の対立をひきおこすことになりました。「日本の教育は文部省によってコントロールされており、国家的な統制が存在している」。教育自由化論をうたった人たちは、教育の現状をそうとらえていました。もちろん、教育自由化論の人たちも、教育の量的な拡大や教育水準の維持、地域格差があった教育の平準化という意味では、国の統制は一定の役割を果たしたと認めています。しかし、八十年代に入ると、高校進学率は九五パーセントを超え、七十年代後半から横ばいになっていきます。③「量的な拡大は実現できなかったから、国家的な統制は不要である」さらには、「統制があることが、さまざまな教育問題の解決の桎梏(しごく)になっている」と考えられたのです。

当時の義務教育における授業は、真ん中くらいの成績の生徒を対象にしています。成績下位層は授業についていけず、「落ちこぼれ」が出る。あるいは「吹きこぼし」といって、授業がつまらないと思う成績上位層が出てくる。当時の教育現場では、上位層と下位層の双方から不満があがっていたのは事実です。

そこでうたわれたのが、教育自由化論です。当時の日本は教育改革だけでなく、行政改革の必要性も高まり、国鉄や電電公社などの公的部門が民営化されました。そういう状況のなかで、教育の規制緩和をおこない、教育の自由化を実現する必要性が主張されたといえます。

3



#### 4 教育自由化論の教育をめぐるパラダイム



#### 6 現代の教育をめぐるパラダイム



#### 5 従来の教育をめぐるパラダイム



教育自由化論を主張する人たちは教育をサービスとらえて、教育サービスの消費者である子どもや親と、教育サービスの供給者である学校や教員という枠組みで教育を考えました。供給者がさまざまな教育サービスを提供し、消費者がそれを選択すると想定したのです。<sup>4</sup>

もちろん、多様な教育サービスをやみくもに提供するのではなく、一般的な商品売り買いするときのように、消費者の要求を意識して、消費者が求めているものを提供するわけです。だからとうぜん「教育は商品とおなじなのか」「サービスなのか」という批判的な議論がわきおこるのですが、教育自由化論者たちは、「教育もサービス」だと考えています。教育の自由化を促進し、消費者の要求を念頭におきながら、いろんな教育サービスを提供して、親や子どもたちに選択させるということですね。それは教育を市場にゆだねることになりますから、選ばれないものは消え、選ばれるものがさらに多く提供される。それをおして市場主義的な教育改革がすすみ、結果的に教育の質的向上につながるということを思い描いていました。

となると、まず規制緩和しておかないと多様なサービスは提供できないですね。それで、たとえば公立の小中学校の選択の自由を認めるという学校選択制がうちだされています。公立の小中学校には学区制がありますから、住んでいる地域によって通学できる学校が自動的に決まっていますが、学校がそれぞれに特徴のある教育方針をうちだして、子どもや親に選んでもらうというのが学校選択制です。そうすることで、選ばれない学校は選ばれるように努力し、選ばれる学校はますますよくなり、教育の質が高まると考えられていました。

このように、現実の教育が抱える問題を改善するために、個性というキーワードをつかって教育改革しようとしたことがわかります。教育にかんする消費者の選択肢を増やすために個性化、多様化をすすめようというのが教育自由化論者たちの主張でした。もちろん提案がすべて実施されていくわけではないのですが、こういう議論がはじめて本格的に表に出てきたという意味では大きな出来事だったと思いますし、九十年代以降の教育改革の方向性を提示したものだだと思います。

#### 教育はサービスか？

ところで、このような新しい考え方が登場してきたことによつて、教育をめぐる議論の枠組みも変化していきます。従来の教育をめぐる議論は、単純化していえば「文部省」対「日本教職員組合（日教組）」というパラダイムでおこなわれていました。これが従来型の教育を論じるときの基本認識です。<sup>5</sup>

<sup>5</sup>

文部省の下には都道府県の教育委員会、市町村の教育委員会があつて縦のラインでしっかりと統制されていた。それに反対する人たちは、国による規制を撤廃し、じつさに教えている教員や学校の現場の裁量権を拡大することを主張していました。国による教育の中身への口だしを忌避し、国は「外的事項」にのみ関与すべきだと考えていたということがわかります。

外的事項というのは、たとえば、学校の建物や教職員の給与など、学校教育そのものをなしたたせることからのことで、行政はそのようなものに対してのみ責任を果たすべきであると考えられたのです。それに対して「内的事項」という言い方があるのですが、それはなにをどうやって教えるのかという教育の内容や方法論のことをさします。

そういう意味では、文部省と日教組は内的事項に対する考え方は異なりますが、外的事項にかんしては国が公教育として行政的な責任をとらざるを得ないという認識しており、この点ではおなじでした。

いっぽう、教育自由化論者たちは、そうは考えていません。国の統制をできるだけ緩和して、市場に任せて、需要と供給との関係で教育を考えていくという発想です。

従来はA（文部省）とB（日教組）の対立でしたが、C（教育自由化論）が加わって、三つ巴の対立になった。<sup>6</sup> 文部省と日教組とは考え方が違いますが、でも教育自由化論に対しては、両者ともに公教育の擁護、平等主義という点において共通する側面があるわけです。もちろん、両者が求めている公教育や平等主義のありようは異なりますが、その結果、自由対平等という対立軸が顕在化することになります。自由と平等は、おなじような志向性をもつものだと思っているかもしれないけれども、教育において自由を追求すれば、個性化・多様化したものなから、個人が自由に選択するということが起こり、平等を追求すれば、だれかの自由が抑制されることもあります。自由対平等という問題がはじめて認識されていきました。

この問題は現在も存在しています。現代の教育を考えるうえで二六年も前の臨教審の答申が重要になるのは、こういう対立の枠組みが、この時期に生まれたからです。しかも、現在の教育改革のいくつかは、この枠組みのなからすすんでいるのです。

#### 「個性」とはなにか、自分の「個性」は語ってみたい

先週の講義の終わりに、「○○ができないのも個性だ」というちょっと極端な言説についてどう考えるのか、みなさんに意見を書いてもらいました。学校教育において「個性を重視する」ということとはどういうことなのか、考えるポイントになると思った



#### 受講生の感想

● 法学部 一回生（女性）

いじめの問題がマスコミでとりあげられます。いじめはむかしからあって、最近になって表面化しただけ。その表面化の過程についての講義が印象的でした。

● 教育学部 一回生（女性）

ゆとり教育の話題に興味があったので、戦後の教育史について知りたくて受講しました。「つめこみ教育」から「ゆとり教育」になぜ変わったのか。どんな考え方がゆとり教育の制度につながったのかわかりました。

#### \* 2 公教育

公教育制度の「公」は、「公立」という意味ではなく、公的な制度にのっとった教育のことをさす。近代以降、国民形成をはかり、国全体として教育水準を一定に保つ必要が生じたことから生まれた考えであり、私立学校も公教育をおこなう学校である。

学生A 賛成。個性だと感じることで、「できない」という苦手意識を減らすことができるし、逆にとらえれば、「○○ができるのも個性だ」と考えることもできる。「できない」とも「できる」とも個性と受けとれることで、個々の潜在的な能力を伸ばすことにつながる気がする。

学生B 小中学校の児童・生徒は、個性の形成途中です。そのような段階で個性ということばをつかうことによって、決めつけた「個性」を内面化させることにつながり、結果的に「○○ができてくてもしょうがない」という態度が身についてしまいます。

学生C できなくてもしがたのないうことだと言いたい意図は感じられるが、個性とまでいうと、そのことばに甘んじて、勉強しなくともよらうに聞かせる。

学生D 反対です。勉強とは「わからないできない」に挑むこと。できないことを個性と言いきってしまったり、挑むことをやめてしまう気がします。

からです。みなさんの考えをプリントにまとめましたが、これを読むかぎり、個性というのはやっぱり魅力的な言葉であるようです。いくつか紹介しましょう。

「個性」と言われてホッとするとするのは、やっぱりあるんですね。「個性を重視する」と言われると表立って反論しにくいし、画一的な形式の平等よりはよいと思ったりします。たしかに個性というには「できなくて優秀はない」というかたちで、多元的な価値観が含まれていると思います。でも「○○ができないのも個性だ」と言われると、「ちょっと待って」と言いたくなるころがあるって、それは「個性は自明のもの」なのかという問いにつながっています。

そもそも個性というものは生まれつきのものなのか、あるいは、育っていく環境のなかでいろいろな人たちと接しながら社会的な要因によって形成されるものなのか。生まれつきだと断言したら、話はずいぶん単純です。「生まれつき決まっているんだ」と、それでいい「うってこになるんですが、成長の過程で形成されていくとすれば、個性は不確かなものといえますよね。「個性に応じた教育」と言われると「かむかむ」と納得するところもあるけれども、その個性自体があやふやなものだとすれば、その教育はどいつかたちで成立しているのかという新しい問いが出てくる。

あるいは、「個性の尊重」には冷却論が潜んでいるのではないかとこの問いも立ちあがります。以前に話しましたが、「冷却」とは「ほどほどにしろよ」「そんな無理しなくていいよ」とあり、その逆に「加熱」とは「がんばれ、がんばれ」ということです。これにかかわる意見もたくさんありました。これを読むとみなさん、がんばって京大にきたんだなと思います。

いずれの意見にも、「個性を伸ばす」教育は、「苦手なものから降りる」ことを助長することになりかねないという危惧が存在するようです。

**労働市場に組み込まれている学校教育**

近代社会において学校教育は、人材の育成という役割を否応

学生E 「○○ができない」にも段階がある。努力しだいで補えるレベルが、根本的に補えないレベルのかを考えるべき。個性ということばに甘んじて、努力しなくなる場合もあるのではないか。

なしに担っています。かつてのように、家業を継ぐという選択をする人が多かったころは、学校教育の成績にそんなに神経質にならなくてもよかった。しかし現在はなかなかそういうわけにいかないように思います。それは現実問題として、学校が労働市場に組み込まれてしまっているからです。

この学校に行つて、なにを学んだのかによって、その後の生活条件の差異が生まれる可能性がある。「好きなことをするのがいちばん」という考え方もあるけれど、早々に学校教育から撤退することが、その後の人生のマイナス要因になる可能性もある。断言はできないけれど、「嫌なことはやめておこう」という発想で選択をして、「一〇年後、二〇年後に「しまった」と思つかもしれない。「あなたがそれを選んだのだから自己責任」と臨教審は言っていますが、そんなにすっきりと言えるでしょうか。「個性の尊重」は麗しいことですが、そこに冷却論が潜んでいることは気にしておかないといけないですね。

「個性に対する評価の多義性」についての意見もあり、なかなかうまいところをついているなと思いました。教育が労働市場に組み込まれていることを大人は認識しているから、こいつは対応をとるのですね。

また、「個性の尊重」を語る主体に着目した意見もありました。だが、どいつの文脈で、どいつの立場で語るのかで、個性の尊重の社会的意味はずいぶんちがう。そういう意味でも、「個性の尊重はすばらしい」とは、手はなして言いきれないのではないのでしょうか。

きょうは個性重視、個性尊重ということばに注目しながら、教育における個性の重視ということが、どいつの社会的背景のもとに登場し、どのような意味を含みこんでいるのかということを考えてみました。来週は、臨教審答申をつけて、どのような教育改革がすすんでいったのか、その具体的な教育改革のありようを考えていると思います。

二〇一三年一月六日(水) 三隈

**受講を終えて**

「教育は紋切り型で語れるものではない」と小山先生。今回のテーマの「個性」もおなじ。いろんな角度からの考え方を提示され、「個性」ということばの表面的なイメージだけにとらわれていた自分に気づく。「知識を教えるのではなく、さまざまな視点からものを考える姿勢、情報との向きあい方を教えたんです」。教育を受ける「当事者」としてとらえていた教育を、すこし立ち位置を変えて、客観的な目線でながめると、知らないことばかりだ。当方、「ゆとり世代」のどまんなか。「ゆとり世代だもんね」と言われてムツとする気持ちも、そのことばに甘える気持ちもある。受講を機に、落ちついて考えてみる必要がありそうだ。(結)

●法学部 一回生(男性)  
将来は教育にかかわりたくて受講しました。「個性」ひとつとっても、教育という観点、個人の観点では見方がちがいます。新しい考え方に気づくのが楽しみです。

●小山先生のゼミ生(女性)  
先生ははじめて、こんなふうに話す教育については、「正しさ」という観点でなく、「制度」としてとらえる先生の講義を聞いて、教育も政策なんだと感じました。

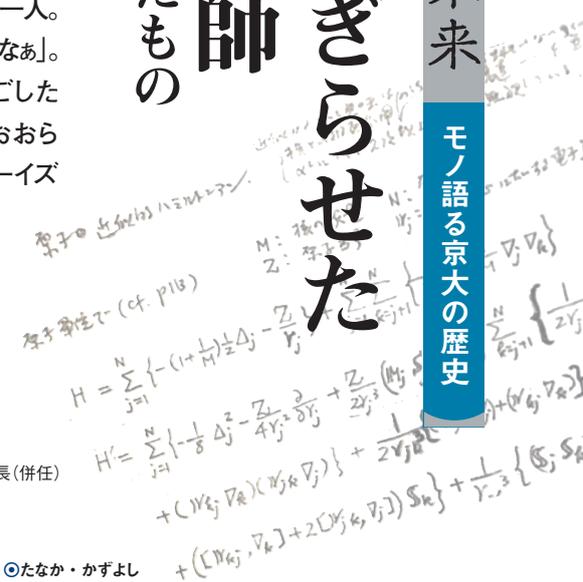
学生F 「○○ができない子ども」に対する大人の対応に矛盾があると感じることはあります。たとえば、運動会のかけてっでビリだったら、「よくがんばったね」と子どもに声をかけるというふうで、学業の成績がよくないと叱ることがあります。

学生G 「○○ができない」という状況の裏には、さまざまな要因——もって生まれた能力、その子がおかれた環境(貧困など)が考えられる。たとえば為政者が貧困対策などを怠り、そのことを正当化するような文脈で「できないのも個性ですから」と言ったら腹がたつ。



# 熱意をたぎらせた 寡黙な恩師 福井謙一の遺したもの

1981年に日本人初のノーベル化学賞を受賞した福井謙一博士。その研究理念を受け継ぐ福井謙一記念研究センターには、博士直筆の板書が保存されている。難題をふっかけて学生を困らせるのが好きだった博士のもとで、弟子たちは鍛えられ、科学者としての〈構え〉を身につけた。田中一義教授もその一人。「この人だけは超えられへんなあ」。軽口をまじえて恩師と過ごした日々をふりかえる、そのおおらかな笑顔の奥に「福井謙一イズム」がたしかに宿っている



京都大学大学院工学研究科教授  
京都大学福井謙一記念研究センター長(兼任)

## 田中一義



◎たなか・かずよし

1950年、京都市に生まれる。1978年に京都大学大学院工学研究科石油化学専攻博士課程修了。米国エナジー・コンバージョン・デバイス社リサーチケミストとしての勤務、京都大学工学部助手、同助教授などをへて、1996年に教授。2012年から福井謙一記念研究センター長を兼任。研究テーマは量子機能材料、物理化学。著書に「物理化学(化学マスター講座)」、(丸善)、「炭素学」(化学同人)などがある。

↑博士の蔵書の一つ、量子化学の専門書には、あちこちに細かな書きこみが残されている

「シカゴのバスの運賃箱のたてる音は、何拍子か知っているか」。研究室の学生の部屋にふらりと現れて、にやにやしながら突拍子もない質問をする。福井謙一博士のそんな姿を忘れられない。「そんなこと知りません」。ぶっきらぼうに答えると、「どつは五拍子なんや。ほかに五拍子って知ってるか」。「チャイコフスキーの『悲愴』第二楽章ですか」、「そやそや、よく知ってるな」。満足げにニヤリと笑う。

福井博士は一九一八年に奈良県に生まれ、大阪市西成区の岸里で育った。『プアーブル昆虫記』を愛読し、泥んこ遊びや昆虫採集、植物観察に夢中になった。「奈良や大阪の自然

### 「泥んこ遊び」で培った ありのままの自然を見る力

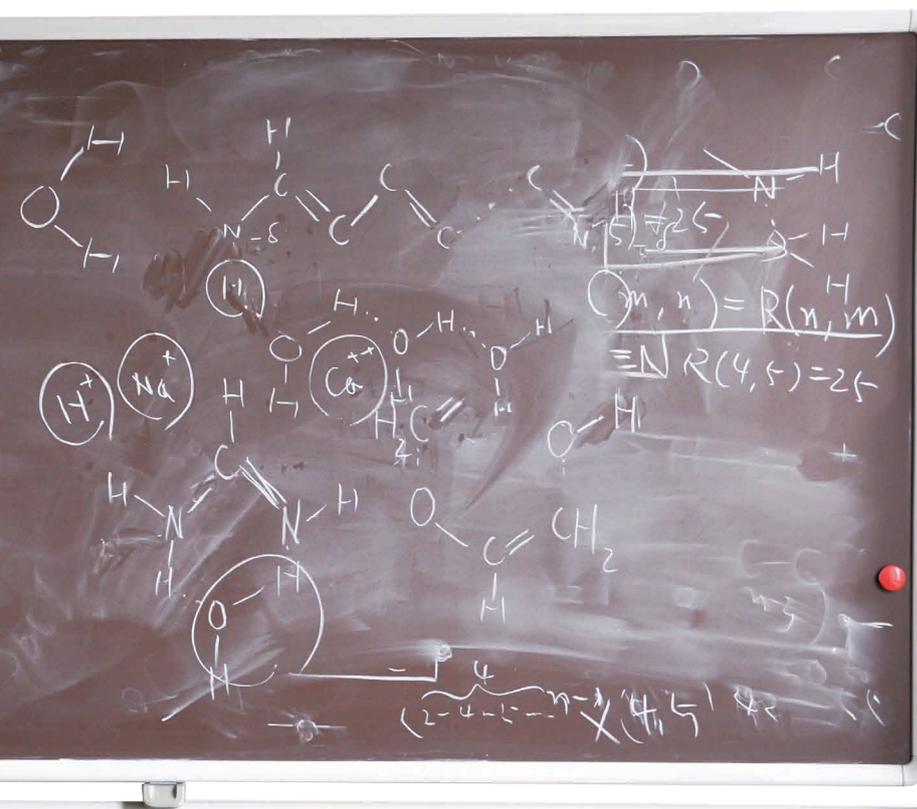
やかされ、怒られて……。自然科学者は、人間誰もが大人より小なり持ち合わせているこの好奇心とか探究心に動かされて、学び、新しいものを創造してきたのである。福井博士が自著『学問の創造』(一九八四年、校成出版社)に綴ったことばだ。

「ありのままの自然を見る」という、体験から得たこの信念は、博士の研究哲学を貫いている。自身の研究テーマの一つである「モデルの組み立て」においても、この姿勢を徹底した。文字から得た自然の知識が、経験による自然の認識に先行することは、自然が「本来の姿とはまったく異なった姿に変容してその人に認識されてしまうに違いない」と



1981年10月、福井博士のノーベル化学賞受賞を祝って集まった京都大学工学部石油化学教室の職員と学生。一番弟子の米澤貞次郎先生(博士の右後ろ)をはじめ、アメリカから帰国したばかりの田中教授の姿もある(左から2人め)。福井博士に鍛えあげられた門下生たちは、いまこの分野を牽引する役割を担っている(写真提供:株式会社化学同人)

福井博士直筆の黒板。「残そうと意図したわけではなく、たまたま消されずに残っていたんです。書かれている数式の内容から、亡くなられる2年前の1996年ころのもの」と推測できます」と田中教授。生前の博士の研究活動を物語る貴重な資料として、誤って消されることのないように透明のケースで保護され、記念研究センターの研究室で保管されている



危惧し、それは「危険でさえある」と断言し、「自然のなかで無理のない」理論の創造をめざした。

福井博士のその信念は、ノーベル賞受賞のきっかけとなる「フロンティア軌道理論」のひらめきに結びつく。化学反応は原子と分子のレベルで起こるが、「原子・分子の世界を支配する法則は、ほかならぬ量子力学である」、「すべての化学反応は原理的には量子力学の言葉（概念）で説明できる」はずと、量子力学を化学の分野に導入した。好奇心から身につけた物理学の知識と、あるがままの自然の姿を見つめようとする姿勢が、理論を前へと押しすすめた。

「自然は、物理学、化学、生物学なんて垣根を知らない。そんなものは人間がかってに分けたものだ」。それが博士の口ぐせだった。

## 〈あがり〉のない人生すごろく

「フロンティア軌道理論」の業績で、福井博士は一九八一年にアジア初のノーベル化学賞を受賞した。福井研究室では、「ちかちか受賞されるだ

ろう」とささやかれていたが、多くの日本人には青天の霹靂だった。京都大学の化学系の研究者でも、博士の功績を知る人は少なかつた。

私は京都大学四回生の卒業研究で、福井研究室の門を叩いた。指導の厳しさゆえに「蟻地獄」と称されていたが、教えを請うなら福井博士しかないと考えていた。ノーベル賞受賞の九年前のことである。

大学院修了後に渡米して、エネルギー開発関連の企業に勤めた。福井研究室のさいごの助手としてふたたび博士のもとに戻ることに決めたのは、受賞の報せの直前だった。周囲がにわかに熱気を帯びるなか、「ノーベル賞の選考委員はちゃんと見ていたんだな」と、私たち門下生は静かによるこんだ。

授賞式が近づくとつれ、周囲はますます騒がしくなり、博士はマスキの取材に迎えたり、テレビ番組に出演される機会が増えたが、その表情や口調、ふるまいは、いつもとまったく変わらなかつた。その淡々とした姿、そして受賞後の生きざまにも、私はおおいに影響を受けた。

福井博士の人生には、すごろくでいう〈あがり〉がない。だれもがその価値を認めるノーベル賞をもらったら、ふつうは〈あがり〉たくなるものだ。落ち着いてしまつて、以前ほど研究をしなくなる人も少なからずいる。しかし、福井博士は受賞後も変わらず、むしろ、より精力的に研究にうちこんでおられた。いくつになつても〈あがりがない〉ことの美学を感じた。

## フロンティア軌道理論

化学反応が起こるすべてのしくみを示せるような理論がなかったころ、福井謙一は「フロンティア軌道理論」という、化学反応のほとんどをカバーできる画期的な理論を導いた。ノーベル化学賞を共同受賞したロアルド・ホフマンも異なる手法でその目的に迫っていた。それまでの有機電子説では、化学反応を説明するために分子に含まれるすべての電子のうごきを考慮していたが、この理論は、相手の分子が近づいてきたときに、最前線（フロンティア）に出て重要な働きをする特定の電子だけに注目したことが特徴。

→大学院での講義でのひとコマ。ほとんど喋らずに「式に喋らせる」授業は、むずかしいと評判だった

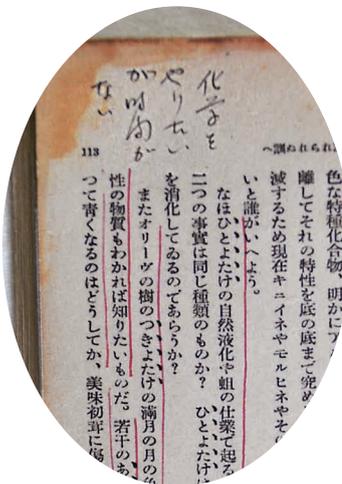
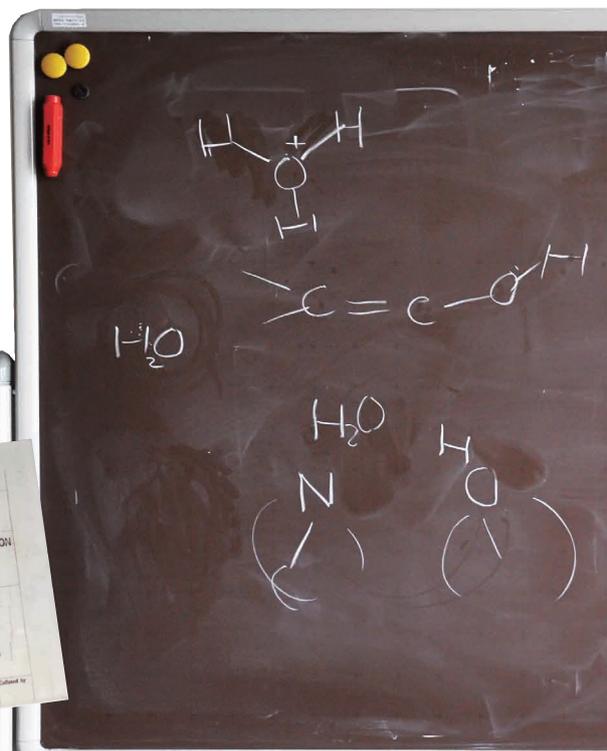
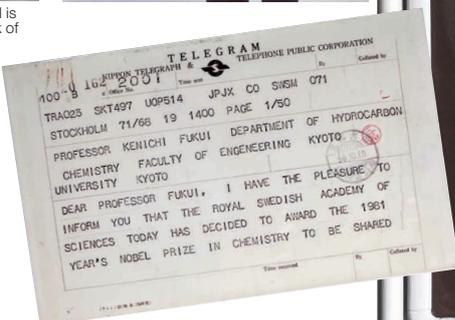
↓ノーベル賞メダル（レプリカ）。裏面には自然の女神のヴェールをはがそうとする科学の女神の姿が刻まれている



The Nobel Prize Medal is a registered trademark of the Nobel Foundation



→1981年10月20日に工学部石油化学教室宛に届いたノーベル化学賞授賞通知の公式電報（レプリカ）。授賞発表は前日の19日。テレビ画面に現れた「福井謙一」の字幕に福井家は大騒ぎになったという



福井博士が「心の師」とよび、愛読していた「ファーブル昆虫記」（1925年版）。ページのすみに「化学をやりたいが時間がない」とメモが残る

## 福井謙一博士略年譜

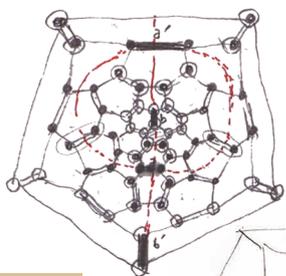
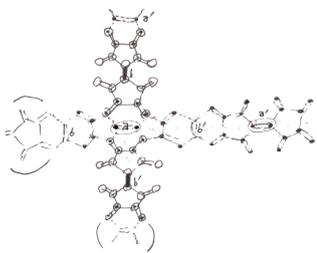
- 1918年10月4日 奈良県生駒郡平城村（現奈良市押熊町）に生まれ、大阪市西成区岸里で育つ。
- 1935年（16歳） 旧制大阪高等学校理科乙類入学
- 1938年（19歳） 京都帝国大学工学部工業化学科入学
- 1941年（22歳） 京都帝国大学大学院入学／陸軍に入隊（燃料廠配属）
- 1943年（24歳） 京都帝国大学工学部講師（燃料化学科）
- 1945年（26歳） 京都帝国大学工学部助教授（燃料化学科）
- 1947年（28歳） 友栄夫人と結婚
- 1951年（32歳） 京都大学工学部燃料化学科教授（後に石油化学科と改名）
- 1952年（33歳） 「フロンティア軌道理論（当時はフロンティア電子理論と呼ぶ）」の第一報を発表
- 1971年（52歳） 京都大学工学部長を併任
- 1981年（62歳） 「化学反応の理論的解明」でノーベル化学賞を受賞
- 1982年（63歳） 京都大学停年退官、京都大学名誉教授／京都工芸繊維大学長（1988年5月31日まで）
- 1983年（64歳） 日本学士院会員
- 1988年（69歳） 京都工芸繊維大学名誉教授／財団法人基礎化学研究所所長に就任／勲一等旭日大綬章受章
- 1998年（79歳） 1月9日逝去



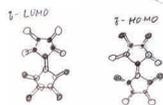
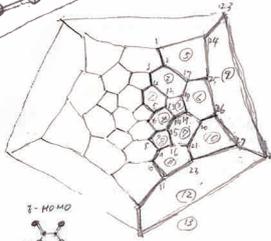
京都帝国大学工学部工業化学科入学時。襟章のTの文字は工学部を表すtechnologyのT



1981年、ノーベル賞授賞式



←1997年に手術入院する前夜に、チラシの裏面に書かれた「フラーレン分子の軌道相互作用の解析」。これが博士の絶筆となった



↓就職のための渡米直前に田中教授を見送られた福井ご夫妻。生まれて間もない娘とともに(1979年6月撮影)

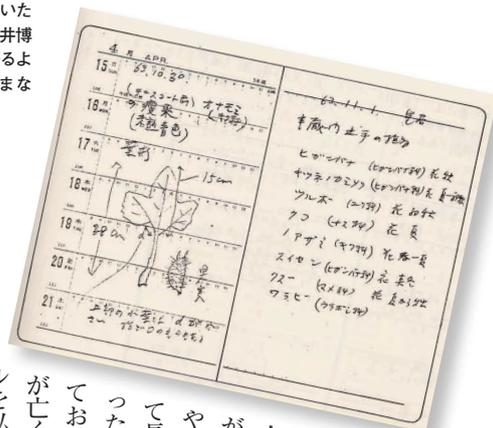


使ったが、博士は使い方すら知らなかった。研究室にはもちろん計算機があり、京大の大型計算機も使ったが、博士は使い方すら知らなかった。計算はもっぱら筆算だった。研究室にはもちろん計算機があり、京大の大型計算機も使ったが、博士は使い方すら知らなかった。



↑基礎化学研究所(当時)の研究室は、博士が亡くなられたあとそのままに残されている。弟子たちの論文を封筒に入れてきれいに整理していた几帳面な博士。晩年の福井博士の好奇心の広さを物語るように、本棚にはさまざまなジャンルの書物が並ぶ

↓散歩が好きだった福井博士。琵琶湖疏水沿い、法然院、曼珠院などがお気に入りの散歩コースだった。散歩にもかならずメモを携帯し、草花や昆虫、野鳥の生態を観察し、スケッチ画入りで記録していた



## 生身の博士と接するおもしろさ

研究室での福井博士は、一人静かに考えておられることが多いが、ときにはスタッフや学生を集めて、黒板をつかって長時間、議論されることもあった。話しながら考えを整理しておられたのかもしれない。博士が亡くなられて一六年、そのスタイルを私はいつしか真似ている。

なかったかもしれない。いつも小さなメモ帳と鉛筆を手に、なにかを思いつくたびにこまめに書きとめていた。ときには学生たちを困らせるアイデアをせつせとメモしていたのかもしれない。「メモをしないとすぐに忘れてしまうような着想こそ貴重なのである」が持論で、枕元にはかならず紙と鉛筆を置いていたという。

もともと印象的だった問いかけは、「式を使わずに、ひとことで説明しなさい」。理論化学は化学式や数式をつかって物事の真理にせまる学問。なのに博士はあえて「式を使うな」と私に求めた。虚を衝かれ、困惑した。しかも核心をついた答えが出ないと、すぐに機嫌が悪くなる。「憎たらしい」と思ったことは何度もある。でもそれこそが、生身の博士と接するおもしろさだった。

博士の鼻をあかそうと、たくさんの本を読み、知識を蓄えた。弟子たちはみな、そうして鍛えられ強くなった。学生を教える立場になって気づいたことがある。博士は私たちに、研究者として対等に見てくださっていたのだと。

## 「サイエンスの探検家でありたい」と願った恩師

晩年、福井博士の好奇心の触手は、化学や物理学の枠にとどまらず、生物学や遺伝子工学にまで伸びていた。福井謙一記念研究センターに展示されている「絶筆メモ」には、傘寿を目前にしてもなお衰えぬ研

究への熱意が刻まれている。チラシ広告の裏面に書かれた「フラーレン分子の軌道相互作用の解析」の図は、亡くなられる半年前、胃がんの摘出手術のために入院する前日のものだ。自著「学問の創造」にも、「私は研究に内心燃え尽きついている。私は死ぬまでサイエンスの探検家でありたい」とのことばがある。「寡黙な人と語られることが多いが、その内面には「未知」へのすさまじいまでの探究心をつねにたぎらせていた。それが私の知る福井博士だ。

理学部生が博士に、「理学部の化学と工学部の化学は、どちらがほんとうの化学ですか」と尋ねたことがある。博士は迷うことなくさりと、「応用を考える工学部の化学こそ、ほんものの化学や」と言いきった。私たち理論化学者は日ごろ、「役にたたない」と言われ、歯がゆい思いをすることが多いが、理論化学こそが、多様な化学の球体の中心にあり、どの方向にも自在に伸び、さまざまな化学現象の解析や予測に貢献できると信じている。博士のあのひとは、私を鼓舞しつづける。

センターの展示コーナーにはご家族から寄贈された博士ゆかりの品々が並ぶ。細かなメモが書きこまれた蔵書を見るたびに、いたずらっぽく笑う恩師を思い出す。私たちが受け継いだものは、博士がこつこつと積みあげた大きな山のほんの一角にすぎない。「もっと聞いておけばよかった」と後悔ばかりだ。(取材・構成 編集部)

## 京都大学 福井謙一記念研究センター



福井謙一博士のノーベル化学賞受賞を記念して設立された財団法人基礎化学研究所は、博士の逝去後に京都大学に寄附移管され、福井謙一記念研究センターとして2002年4月に発足。博士の研究理念を継承・発展させ、独創的な研究で学術の進歩に貢献することをめざしている。

受賞30周年にあたる2011年にはセンターの玄関フロアに福井謙一博士記念展示コーナーを新設。愛用のタイプライターや書籍、メダルなど、博士にゆかりの文物や写真を陳列している。

●展示コーナーの見学を希望される方は、事前に075-711-7708までお問い合わせください

<http://www.fukui.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学本部構内の旧石油化学教室本館。レトロなレンガづくりの外観、漆喰の白壁に薄緑の装飾が映えるモダンな内装が特徴の建物の一角に、「学生総合支援センター\*」の障害学生支援ルームがある。村田淳さんは、その前身にあたる「身体障害学生相談室」が設置された2008年からコーディネーターとして携わり、障害のある学生たちによりそってきた

# 頼れる学生とともに考える コーディネーター



◎むらた・じゅん

障害学生支援コーディネーター。2008年から京都大学における障害学生支援を担当し、専門窓口の立ち上げと支援体制の構築に従事。新たな視点を盛り込んだバリアフリーマップ「フリーアクセスマップ」の企画・制作や、日本の大学でいち早く発達障害のある学生への修学支援を実施するなど、多様な支援活動に取り組むいっぽう、学内外における研修・講演なども実施。京都府立大学大学院公共政策学研究所福祉社会学専攻 博士前期課程修了。

支援ルームに入ってきた学生に気づくと、「こんにちは、〇〇さん！」とさわやかに迎える。気さくに話しかけながらも、学生の質問にはてきぱきと的確に答える。「この部屋が、精神的にも物理的にも安心できる居場所になれば……」。そう語る村田淳さんは、学生たちの「頼れるお兄さん」といった印象。

## 足りなくてもだめ 多すぎてもだめ

コーディネーターの村田さんのおもな仕事は、障害のある学生の相談をうけて、どういった支援が適切かを判断し、修学環境を調整すること。移動介助や資料作成（点訳や文字起こし）、ノートテイクなどの情報保障支援など、じつさいの支援活動にあたるのは、支援ルームに登録する約80名の学生サポーター。養成講座や練



習会などで知識や技術を身につける。

支援ルームの根底にあるのは、「合理的配慮」の考え方。すべての人が有する権利や基本的な自由を、障害の有無にかかわらず保障するために、必要・適当で、過度でない支援をす。必要・適当で、過度でない支援をす。必要・適当で、過度でない支援をす。必要・適当で、過度でない支援をす。

学内のバリアフリー化も、修学環境づくりの業務の一つ。京都大学では明治後期や昭和初期の建造物が研究室や会議室として利用されているが、バリアフリーの観点からみるとつかいづらいつい施設も多い。大学に求められる役割は、教育、研究、社会貢献。「学生たちがつかいづらいつい施設では、価値は半減します」。高等教育にすすむ障害のある学生が増えるなか、大学全体でバリアフリーに取り組む

## ともに考え、悩み、つくる支援

ことは大きな課題のひとつだ。



↑道筋を指示するだけでなく、小さな段差、傾斜、坂路など、細かな障壁をきちんと表示することで、適切なルートを選択できる。大学の施設のどこに課題があるのかを浮き彫りにする目的も

←正門からつづく点字ブロック。広大なキャンパスではバリアフリーにかんする課題も多い

## 目標は高く、目線は目の前に

一人ひとりの成長をそばで感じられることが村田さんのなによりよるこび。「就職活動のエントリーシートに自分のことをうまく表現できていると、社会にでる下準備がととのったんだなと、うれしくなります」。卒業生が支援ルームを訪れ、仕事のやりがいや就職活動での体験談をスタッフや後輩に話してくれることもある。

大学と大学院で社会福祉学を専攻した村田さん。きっかけは、重度の障害者施設で働く父親の姿。「障害のある人の存在は、とても身近なものでした。大人になって、その感覚が多くの人と共有できていない現実を知りました」。

かかわる機会が増えれば、理解が深まるはず。京都大学の障害に関連する分野の研究成果や支援活動の現状や課題を知ってもらおうと、「バリアフリーシンポジウム」を開催。全学共通科目でも授業を担当し、障害について学ぶ機会を学生に提供している。「大学がいろんな人に開かれた場所となつてほしい。大きな目標をかかげるいっぽうで、彼らが落ちこんだときに、どうよりそえるのか……」。と、目の前の学生の表情に心を配ることも忘れない。「頼れるお兄さん」はきょうもまっすぐに前を見つめ、笑顔で学生たちを出迎える。



## 「京都大学高校生フォーラム in Tokyo」——松本 紘総長講演会」を開催

2013年11月1日(金)、東京の有楽町朝日ホールにおいて、「京都大学高校生フォーラム in Tokyo——松本 紘総長講演会」を、東京都教育委員会との共催で開催しました。このフォーラムは、首都圏の高校生を対象に最先端の研究成果等についての講演をとおして、生徒たちの大学進学のための明確化と進学後の自己の在り方や生き方に対する意識の高揚をはかることを目的としており、今年で3回目です。

講演に先立ち、首都圏の高等学校から本学に進学した在学生2名が本学や京都の魅力、大学生活の充実ぶりなどを紹介しました。つづいて

松本総長が、「人類の100年後を考えよう!——西暦2100年“太陽系文明”の夜明け」をテーマに講演を行ない、100年という時間や人類が抱える課題を俯瞰し、既存の知識から一歩踏み出して考えることの大切さと、「未来は自分の手でつくるもの」というメッセージを伝えました。会場を埋め尽くした500名の高校生は、数かすの興味深い話に熱心に聞き入りました。

後半では、参加者を対象に行なったアンケート「私が考える人類の100年後」の回答の中から選ばれた高校生7名が、それぞれに思い描く未来像を紹介しました。松本総長のコメントにくわえて、会場を交えての熱心な質疑応答も行なわれ、盛会裏に終了しました。

## 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)に採択

京都大学では2013年度、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に「KYOTO未来創造拠点整備事業——社会変革期を担う人材育成」が採択され、9月1日から事業開始となりました。2014年度からは「京都学教育プログラム」が開始され、学部学生を対象に、京都が抱えるさまざまな課題について幅広く学べる機会が提供されます。

京都大学は、創設のうちに、京都府から創設

費の約6割強にもおよぶ多額の寄付金を得たことや、その後の学部増設時に土地提供等による支援を受けたという歴史的事実があります。この歴史的経緯に照らせば、京都大学は地(知)の拠点としての役割を果たさなければならぬ宿命を負っているといえます。

京都学教育プログラムでは、学生が活動主体となって、本学が有する先進的「知」を用いて京都が抱える現実課題の解決をはかること、そして、それと同時に学生がみずからの人生と社会の未来を主体的に切り拓く能力を培うことをめざしています。

## 大阪大学、神戸大学と「相互の協力に関する協定書」を締結

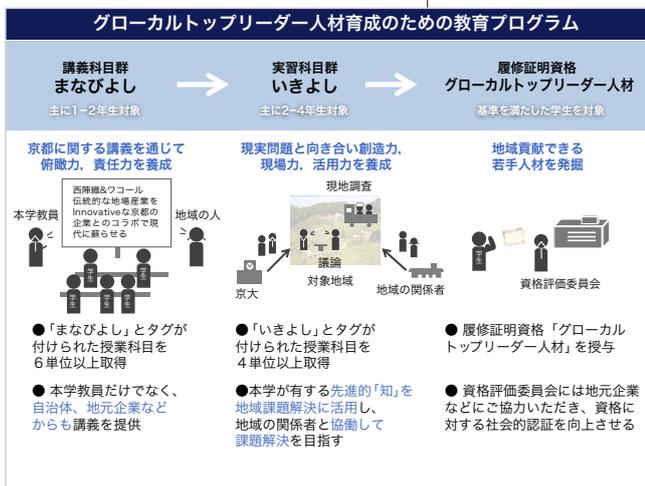
京都大学、大阪大学および神戸大学は、教育、学術研究、社会貢献を狙いとして、積極的かつ効果的な相互間協力関係を構築することで合意し、2013年12月21日付けで「相互の協力に関する協定書」を締結しました。

これら三大学は、地理的に近い総合大学であり、さまざまな取り組みをつうじて協力・交流を行なっています。近年では、高度な研究者・技術者の人材育成に貢献し、もって関西地域の活性化に資するため、2007年度から2012年度まで「三大学連携シンポジウム」を開催しました。

2013年11月文部科学省が、今後の国立大学改革の方針や方策、実施行程をとりまとめた「国立大学改革プラン」を策定しました。2016年度からの第3期中期目標期間にめざすべき国立大学の在り方が示されており、各大学の強み・特色を最大限に生かし、大学みずから改善・発展する仕組みを構築することにより、持続的な競争力をもち、高い付加価値を生み出す国立大学へと変わっていくことが求められています。

この状況をふまえ、三大学がこれまで行ってきた協力・交流をさらに発展させ、各大学の強み・特色を最大限に生かしつつ戦略的な協力関係を構築することが、国立大学を取り巻くさまざまな課題に対応し、社会からの期待に応える大学となるために不可欠であると考え、このたびの協定書の締結に至りました。

今後、三大学は、自主自立を尊重しつつつついっそう協力し、あらゆる分野の課題における協力の実現可能性について必要な協議・検討をし、実現可能な事案から実施してまいります。



## 編集後記

今日の私たちがデジタル・アーカイブ時代の本格的到来を目撃しているのは間違いありません。かつては現地の文書館を訪ねなければ読めなかった資料がパソコン画面上に現れる、なんと便利な時代が来たものかとの感慨を抱く機会は珍しくありません。それでも、インターネット経由では到達できない、いわば「マイナー」な資料に苦勞の末に辿りついた時の喜びはやはり格別です。研究に携わる者に許された数少ない特権の一つとってよいかもしれません。

『紅崩』を資料として考えてみると、自分が刊行に携わる雑誌をこう呼ぶのには抵抗を感じますが、これもまた「マイナー」にカテゴライズされると判断するのが穏当なところでしょう。しかし、往々にして「マイナー」な資料の中にこそ研究の飛躍を促す鍵が見つかることも、私たちがよく知るところです。たとえば、100年後の歴史研究者にとって、大学史や教育史についてのみならず、科学史や芸術史、あるいは地域社会史についての情報を満載した本誌は貴重な資料たりうるように思われます。音楽、国際政治、環境経済、教育学、科学史等々、第25号の内容は、「マイナー」ではあっても参照に値する資料としての本誌の価値を主張するに十分なものではないでしょうか。

「マイナー」な資料につきまとう懸念といえば、散逸です。とくに雑誌の場合、欠号の有無が大きな意味をもちます。バックナンバーを入手することはやや面倒かもしれませんが、第25号の読者の方たちには、せめて本号を保存し、そして次号以降も読みつけていただくことをお願いしたいと思います。100年後の歴史研究者のためにも。

2014年2月  
広報委員会『紅崩』編集専門部会

### 『紅崩』読者アンケートにご協力ください

スマートフォン、タブレットPC、パソコンで下記のQRコードを読み取り(もしくはURLを入力し)、専用フォームにアクセスするか、本誌裏表紙の奥付に記載している発行所宛に、郵送、FAXまたはメールで、下記項目について記入してお送りください。ご協力いただいた方の中から、抽選で30名様に「総長カレー」をプレゼントします。プレゼントの締め切りは2014年9月10日(水)です。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

- 問1 本誌の入手場所  
問2 関心を持った記事  
問3 ご意見・ご感想  
問4 年齢・職業(学年)  
プレゼントに応募の場合  
問5 氏名・住所



URL <http://www.pr.kyoto-u.ac.jp/ja/issue/kurenai/enquete>

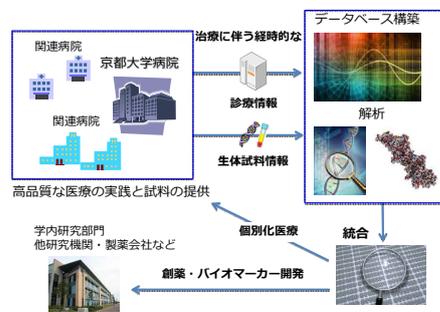
## 医学部附属病院に「がんセンターバイオバンク」を設置

医学部附属病院は2013年9月、がんセンターに「がんセンターバイオバンク」を開設し、稼働を始めました。

がんセンターバイオバンクは、がん治療を受ける患者さんの臨床情報と患者さんから提供された生体試料(例:血液や尿、体の組織など)に含まれるさまざまな生物学的情報を収集・保管し、多様な研究に活用することで、これらをもとに個々の症例にあった「より効果的」かつ「より副作用がない」治療法の開発をめざしています。また、創薬や予防、早期発見などの未来医療のための情報蓄積を推進します。とくに、当院がんセンターバイオバンクでは、経時的に臨床情報と生体試料を収集するインフラが整備され、これは国内外初の試みです。

患者さんから同意を得て生体試料の提供を受けるさいには、生体試料および診療情報などの個人情報が漏洩しないよう匿名化処理したあとにがんセンターバイオバンクに保管します。ストックされたこれらの生体試料、診療情報などはさまざまな疾患の研究に活用されます。こうした研究をつうじて、創薬、新しい診断法・検査法、疾患マーカーの開発など、医療上の成果が得られることが期待されています。詳細は、ホームページ([http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news\\_data/h/h1/news7/2013/130909\\_1.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news_data/h/h1/news7/2013/130909_1.htm))をご覧ください。

### 京大病院がんセンターがんセンターバイオバンク



## 国際戦略「2x by 2020」を策定

本学では、2000年に公表した「京都大学における国際交流の在り方について」とおして、国際交流についての理念を提案しました。さらに、2005年度には、諸外国の教育研究組織等と緊密に連携しつつ国際化を展開するための要綱として「国際戦略」を策定し、積極的な国際交流を展開してきました。

社会・経済のグローバル化が急速に進み、今後さらに国際競争が激化していくことが想定されるなか、本学が世界に卓越した知の創造を行なう大学としていっそう発展するために、2013年6月に、新たに京都大学の国際戦略「2x by 2020」を策定しました。その全文は本学ホームページに掲載しています。また、秋には、全文を掲載したパンフレットも作成しました。詳細はホームページ(<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/international/plan>)をご覧ください。

\*「2x by 2020」(Double by Twenty-Two)とは、研究・教育・国際貢献に関する国際化の指標となる数値を2020年までに2倍にするという新たな国際戦略のスローガンです。



## 京都大学同窓会だより

### 第8回京都大学ホームカミングデー

2013年11月2日(土)に「情熱と信念(Passion and Conviction)」をテーマとし、第8回京都大学ホームカミングデーを開催しました。当日は、公益財団法人稲盛財団の稲盛和夫理事長の講演会や重要文化財に指定されている「清風荘」の見学など、多彩なイベントを実施しました。次回の第9回は2014年11月1日(土)に開催します。



### 台湾 京都大学同窓会

台湾大学において開催された「京都大学—台湾大学シンポジウム」に参加するために松本総長が台湾を訪問した機会にあわせて、2013年12月18日(水)に台湾台北市内において、京都大学に留学等の経験をもつ卒業(修了)生などにより組織される台湾京都大学同窓会が開催されました。同窓会からは、李登輝名誉会長、許敏恵会長はじめ35名、京都大学からは、松本総長および同シンポジウムに参加した小寺秀俊、吉川潔両理事・副学長はじめ50名の出席があり、盛会となりました。

# 遊んで・恋して・挫折して、 楽しかった京大時代

松本修

朝日放送探偵！ナイトスクープ「プロデューサー」

↓2回生、19歳の私。左京区岡崎の真如堂前町の下宿の部屋で。ザ・フォーク・クルセダーズのLPレコードや今西錦司の本などが見える



→4回生の秋、友人の婚約パーティで。前列左端がなんと私で、友人の婚約相手の女性に頼まれて女装している。友人たちはのちに出世して、会社や役所のお偉方や国会議員になった

大学時代ほど、自由で伸びやかで、楽しい時代はなかった。京大の学生として、多くの友人に囲まれて過ごした四年間は、私にとってきらめく宝のような日々だった。その経験はのちの仕事にもしつかり生きていくと思う。

私は滋賀県の田舎に生まれ育った。中学三年のときに東京オリンピックがあった。まだ時代は貧しく、中学の同級生で高校に進学したのは四五パーセント、大学にまで進学したのはわずか五パーセントにすぎなかった。私はその中のひとりで、とても恵まれた存在だった。中学時代から、「修くんは、京大に行くんやろ？」と周囲から期待されていた。期待どおりに私は京大に入学した。昭和四三年の春のことだった。

## 将来のプランなんてナシ！

将来何になりたいという具体的な目標はなかった。第二外国語としてなにげなくドイツ語を選んだ。間もなく全新生生が集められて教授から説明を受けた。「ドイツ語希望者が多すぎる。今やドイツ語だけの時代ではない。現に私もフランス法を研究している」。

私は、法学部生らしい法学部生になるのをやめようと思って、フランス語に希望を変えた。そうして入ったクラスはフランス語だけでなく、ロシア語、中国語を第二外国語とする混成のクラスだった。

全員男子で変わり者も多かった。チンピラ相手に喧嘩をする野人もいれば、哲学者然とした静かな智者もいた。女性にもてるダンディな男もいれば、やたらと淋しがり屋な男もいた。全共闘の闘士となった者もいれば、民青の活動家もいた。多くは私と同様、将来何にならんか、まだ見定めていない者同士だった。

## 完全な自由がやってきた

私も、新しい友人たちも、晴れて大学生となって、何もなくてよいという自由を手に入れた。初めは大学にきちんと通ってみたが、秋になって教養部は全共闘によって占拠され、授業はなくなりました。

完全な自由がやってきた。といっても私は特別なことをしていたわけではない。友人に負けず知性を高めたいと、

## まつもと・おさむ

1949年に滋賀県に生まれる。1972年に京都大学法学部を卒業し、朝日放送に入社。一貫してテレビ娯楽番組の制作に携わり「靈感ヤマカン第六感」、「ラブアタック!」、「わいわいサタデー」、「大改造!劇的ビフォーアフター」などを手がける。1988年に立ち上げた「探偵!ナイトスクープ」は平均視聴率20%を超える人気長寿番組となる。近著に「どんくさいおかんがキレルみたいなの」(新潮文庫)などがある。1991年、「探偵!ナイトスクープ」の「全国アホ・バカ分布図の完成」編で、日本民間放送連盟賞テレビ娯楽部門最優秀賞、ギャラクシー賞選奨、ATP賞グランプリを受賞。2010年から大阪芸術大学教授を兼務。



京女の坂まで「開拓」に行って知り合った女性が輝くばかりに美しく、たちどころに恋に落ちたが、相手にされなかった。生まれて初めて挫折を経験し、一か月ばかりウツになった。

## 「ラブアタック」は青春の記念碑

ずっと学生を続けたかった。卒業して下宿を去るときは、とてつもなく淋しかった。朝日放送に就職してテレビディレクターとなり、二五歳のとき、大ヒットした「ラブアタック」という番組を作った。大学生になったら、どんなバカなことをやってもかまわない。何からも自由だ。今しかない学生生活を謳歌せよ。そんな思いをテレビ番組にした。ひとりの美女であるかぐや姫の愛を奪うために、男たちが「フルコースディナー朝食競争」など、ナンセンスなゲームで競い合う、お笑いの番組である。それは京大の十一月祭での自らの体験を基にして作ったものでもあった。テレビのスタジオに、大学のキャンパスを出現させた。私の青春の記念碑ともいえる番組は、自由な京大暮らしの中からこそ芽生えたのである。



京都大学広報誌  
**系エ前** 第25号  
2014(平成26)年3月25日発行

編集 ● 京都大学広報委員会  
「紅航」編集専門部会  
発行 ● 京都大学渉外部  
広報・社会連携推進室  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
TEL 075-753-2070  
FAX 075-753-2094  
URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/>  
E-mail [kurenai@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:kurenai@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)

制作協力 ● 京都通信社  
デザイン ● em-en design

「紅航」の既刊号は、次のURLで閲覧できます。  
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/issue/kurenai/>

©2014 京都大学  
(本誌記事の無断転載・放送を禁じます)